

百越文化圏における卵生説話の源流考 ——龍母伝説を中心に——

項 青

はじめに

中国の古代神話集『山海経』には多くの神話が収められている。特に神怪変異・遠国異人の風俗を記述した(海経)は、中国神話研究の第一人者袁珂氏によると、古代の諸国の不思議な神話を最も多く収録しているという。⁽¹⁾ その「大荒南経」巻十五に「有卵民之国、其民皆生卵」と、卵民国の人はすべて卵から生まれると記載がある。

⁽²⁾ この卵民国は、現在のどの地域を指すか。「大荒南経」に掲載されている南方であると主張する研究者がいるが、筆者もそれを支持する。この話以外にも、(卵生神話)に分類される多くの説話は、南中国及び東南アジア文化圏に由来を持つ。本稿の上篇では、古小説類や筆記類の逸話等を蒐集することを通じ、分かってきたことについて述べる。特にその後、この地域に暮らしていた漁撈民の存在について言及したい。

なお、漢民族の卵生神話は、卵一個という話型が多いが、ベトナムの始祖卵生説話「鴻臚氏伝」や中国の西南の各少数民族、及び東南アジアの諸国の口承説話は、一胞(肉塊)から複数の卵が産まれ、その中から始祖が生まれるという話型が多い。卵生始祖神話の源流を謎解くため、筆者は広西壮族自治区(古交趾の地の一部)をはじめ、数多くの地方志や南嶺文化圏の古記録を調べ、地名等を古地図と照合しながら、南方説との関連性を探ってきた。このことについては、寡聞にして聞いたことがない。本稿の下篇では、十五世紀頃ベトナムで編纂された『嶺南摭怪列伝』の「鴻臚氏伝」(甲本)を訓読・校異・解釈を試みた。なおすべての古地名の解釈や原文の現代語訳も筆者が行った。

(1)

まず上篇を見てみたい。

上篇

一 卵生神話の分類

卵生神話の出自については、三品彰英『神話と文化史』所収「南方系神話要素」に詳しい。⁽³⁾ 三品氏は世界のどの地域にも卵生神話が存在すると指摘した。更に、彼は各国の神話を集め四通りに分類した。

一つ目は、降下型卵生神話である。神話的嬰兒の入った卵が天上から光とともに降下する、太陽が卵を生む話型で、これは天神或いは太陽の御子が降誕する一つの様式とされる。三品氏はその地理的分布を、朝鮮半島中心及び台湾に認めている。

二つ目は、鳥類によって産み落とされた卵から神の子である人祖が生まれる話型、鳥卵型卵生神話である。三品氏は、鳥類による産卵のほうが卵の出現としては自然であることに加え、天地創造と人祖の出現に鳥類が主要な役割を演じている神話が世界的に分布していることから、その主な分布を確定的に論じることは避けつつも、インドネシア地域における派生の可能性を予想している。

三つ目は、他の三つの型に入らない、竹の中の水や海水の泡、女の血、生きた木、土から卵が化生する化生卵型神話である。但し、化生の観念は、インドネシア方面の創世神話に普遍的なものであり、特別に卵生要素と本質的な関係を持つものではない、と三品氏は述べている。

四つ目はやや変容していて、人間の女性が卵を産出するという、人態的産出型の卵生神話である。この型に属する神話について、三品氏は、「王都を建設したり国家を創建したりした建国の王者や、国家的英雄の出自を語って」おり、またインドネシアを中心とする海洋方面と中国大陸の接触領域に見出されるという分布的特徴を持つと指摘している。周知の通りこの地域には、媽祖信仰や龍母信仰⁽⁴⁾等複数の女神信仰がある。ただ、民族や言語も多様性に富んだ地域であるため、はつきり断言し切れない要素が多く存在する。

なお、この四つ目の卵生説話は、更に二種類に分類することが可能である。その一つは、〈生卵型・卵を生む生母型〉である。水族等との異類婚によつて、処女が懐妊し卵を生み、その卵から生まれた神の子が成長し一族の族長や王に選ばれる。この話型は、中国の黄河流域や朝鮮半島、日本等環太平洋地域に見られる。

もう一つのタイプは、これまであまり研究されていない〈拾卵型・卵を拾う養母型〉の卵生説話であり、本稿で重点的に考察したい話型である。その典型的なタイプは、「老婆が、水辺で一個（複数もある）の卵を拾い、自宅に持ち帰る。暫くすると卵から龍蛇類、或いは人間の子どもが生まれ、老婆とその子どもは仲良く暮らし、次第に裕福になる。この話が後に世に知られ、人々は彼女を〈龍母〉と呼ぶようになった」というものである。いわゆる日本の桃太郎伝説に似たタイプだが、この型の説話の受容範囲は、主に東南アジア、インドの一部地域、及び中国珠江流域といつた南中国、いわゆる百越文化圏を中心とする。

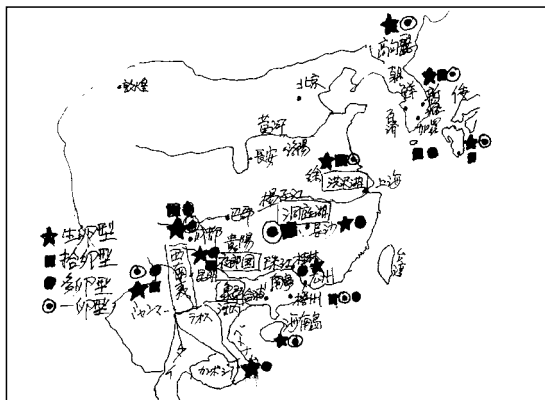
そもそも処女が〈生卵型・卵を産む生母型〉と中年女性による〈拾卵型・卵を拾う養母型〉の二タイプの話型は、根本的に異なるものだと認識すべきである。以下〈拾卵型・卵を拾う養母型〉について、代表的な説話を取り上げながら、東南アジア及び南中国における龍母卵生伝説の様相を見ていきたい。

二 〈拾卵型・卵を拾う養母型〉龍母卵生説話の諸相

（以下の論述中には多くの国と地域、また河川及び地名等が出てくるため、次の自作の地図と卵生説話の各型の分布図を参考に、本稿を読んでいただきたい。）

① ⑦ 先ず、中国最古の龍母卵生伝説とよく紹介される話を見てみたい。三〜四世紀の六朝・劉宋年間、沈懷遠撰『南越志』⑦「端溪温媪」の話である。

① 昔有温氏媪者、端溪人也。居常澗中、捕魚以資日給。忽於水側遇一卵、大如斗、乃將歸置器中。經十日許、有一



物如守宮、長尺餘、穿卵而出、因任其去留。稍長二尺、便能入水捕魚、日得十餘頭。稍長五尺許、得魚漸多。常遊波水、縈洄媼側。媼后治魚、誤斷其尾、遂逡巡而去。數年乃還。媼見其輝色炳耀、謂曰、「龍子今復來也。」因盤旋遊戲、親馴如初。秦始皇聞之曰「此龍子也、朕德之所致。」乃使以元珪之礼聘媼。媼恋土、不以為樂。至始興江、去端溪千餘里、龍輒引船還、不逾夕、至本所。如此數四、使者懼而卒。止不能召媼。媼殞、瘞於江陰。龍子常為大波至墓側、縈浪轉沙以成墳、人謂之掘尾龍。今人謂船為龍掘尾、即此也。

端溪に住む温氏という老婆は、常に谷間で魚を捕って暮らしていた。ある日、水辺で大きさ二升ほどの卵を拾った。それを家に持ち帰り、器の中に入れて十日ばかり経つと、中から守宮（ヤモリ）のような生き物が生まれた（傍線）。それは成長するにつれ、水中からたくさん魚をとって来るようになった。いつも老婆の周りで水遊びをしていたが、ある日のこと、老婆が不注意でその尻尾を切ってしまった。それを期に、戸惑いながらも老婆の元から去ったが、数年後再び戻ってきた（波線）。老婆はその立派な姿からその子のことを「龍子」と呼ぶこととし、関係は元通りになった。都に住む秦の始皇帝が、ある時この噂話を聞きつけ、龍子の出現は自分の徳の表れたと言い、使者に皇后として招くための元珪（瑞玉）をもたせ、端溪に龍母を迎えるよう派遣した。しかし老婆は郷土を離れたくなく、嫌々ながら上京した。その途中、始興江で、龍子が何回も現われ、老婆の乗った船を引き戻そうとした。このため、使者が恐怖のあまり死んでしまった。結局、老婆は五嶺を越えることなく、故郷に戻った。老婆が死んだ後、村人は江の西側に墓を作ってあげたが、龍子も度々大きな波を起こし、河の砂等を巻き込んで墓を作って、墓参りに来た（傍線）。人々はその龍子を「掘尾龍」と呼んだ。

この話は、秦の始皇帝時代の南越地方の端溪（現在の広西壮族自治区梧州市東南部の徳慶）を舞台とするものである。龍子と養母である老婆との親子愛が中心に語られるが、今回は端溪地方と始興江（今の広東省韶関市北東あたり）という地名に注目したい。また、地元の人が船のことを「龍掘尾」と言うようになった（破線）という起源説に、南越地域の水上生活者の間に伝承されたことが窺われる点も押さえておきたい。

次に、九世紀頃の唐昭宗時代の広州司馬・劉恂撰『嶺表録異』巻上の「悦城温媪」という類話を取り上げる。

②温媪者、即康州悦城媪婦也。績布爲業、嘗於野岸拾菜、見沙草中有五卵、遂收歸置績筐中。不数日、忽見五小蛇殼、一斑四青。遂送於江次、固無意望報也。媪常濯浣於江辺、忽一日魚出水、跳躍戲於媪前。自爾爲常、漸有知者、郷里咸謂之龍母、敬而事之。或詢以災福、亦言多徵応。自是媪亦漸豊足。朝廷知之、遣使徵入京師。至全義嶺有疾、却返悦城而卒。郷里共葬之江東岸。忽一夕、天地暝晦、風雨随作、及明已移其塚、並四面草木。悉移於西岸矣。

温という老婆は、康州府（現在の広西壮族自治区梧州市東南部の徳慶）の悦城の寡婦である。織物をして生計をたてていたが、ある日岸辺で野菜を拾っているうちに、浅瀬の草むらに五つの卵を見つけた。筐に入れて持ち帰ったところ、数日後五匹の小さな蛇が殻から出てきた。一匹は斑の模様で、四匹は黒色であった（傍線）。老婆は蛇を川岸に送り届けたが、報恩など全く期待していなかった。その後もいつもと同じように河辺で洗濯等をしていると、ある日突然魚が水面に出てきて、老婆の前で跳びはねながら踊った。暫くこのような状況が続き、次第に周りに知られるようになった。郷里の人々はみんな老婆を「龍母」と呼び、敬うようになった（波線）。また、人々が吉凶を占ってもらうと、不思議なくらいよく当たるため、老婆の生活は段々豊かになった。朝廷がそのことを知り、使者を派遣して、宮中に召し上げることとした。ところが、全義嶺（今の広西壮族自治区桂林市北東にある霊渠あたりに横たわる嶺）に辿り着いたところ

で病にかかってしまい、嶺を越えることなく、郷里の悦城に帰ったが亡くなってしまった。郷里の人々は老婆を江の東岸に葬った。ある日の夕方、突然天地が真っ黒になり、風雨がこの地を襲った。翌朝になってみると、老婆お墓も含め、周りの草木も、全部江の西岸に移っていたという(傍線)。

前話と比べると、拾われる卵が五つであること、龍子が現われないこと、老婆の墓が一晩で移動すること等が異なるが、その他のプロット(構成)はよく似ている。舞台となる「康州府悦城」と「全義嶺」については、地名は異なるものの、文化圏は同じ嶺南地域である。また、広州刺史の劉恂が編撰した当地の『嶺表録異』に集録されている。現在、この梧州地区には「五龍子」の信仰が残る。¹⁰⁾

時代が下って若干の変容は見られるものの、この龍母伝説は、同じ地域の話として脈々と伝えられていく。その様相は、清代・屈大均撰『広東新語』に窺うことができる。本書の巻六「神語篇」に次のような記載がある。

③龍母温夫人者、晋康程水人也。秦始皇嘗遣使尽礼致聘、将納夫人后宮。夫人不樂、使者敦迫上道。行至始安、一夕龍引所乘、船還程水、使者復往、龍復引船以歸。夫人没、葬西源上。龍嘗爲大波、縈浪轉沙以成墳。会大風雨、墓移江北。每洪水淹没、四周皆濁、而近墓数尺独清。墓之南有山、天将雨、雲氣必先群山而出。樹林陰翳、有数百年古木。人不敢伐、以夫人有神靈其間云。

夫人姓蒲、誤作温。然其墓当靈溪水口。靈溪一名温水、以夫人姓温故名。或曰、温者、媼之訛也。夫人故称蒲媼、又称媼龍。唐李紳詩、風水多虞祝媼龍。然媼非生龍者也、得大卵而畜之、龍子出焉。養之以飲食、食物龍得長大。蓋古之參龍氏也。始皇以爲神、遣使迎媼。以嘗聞徐福言、海神之使者銅色而龍形、光上照天。意媼其同類也。求三神山患且去、船風輒引而去、豈亦龍之所爲也。

龍母温夫人は、晋康郡（現在の広西壮族自治区梧州市東南部、徳慶あたり）の程水の人である。秦の始皇帝はかつて使者を派遣して礼をもつて后宮に招待したが、夫人は喜ばず、無理矢理船に乗せた。途中の始安（傍線。現在の広西壮族自治区桂林地区）に着いたある日、夕方に龍が現われ、龍母の乗った船を故郷に曳き戻そうとした（波線）。使者はそれを無視して再び進めるが、龍も諦めず結局故郷へ曳き戻した。夫人が亡くなった後、西江の上流の西側に埋葬したが、龍が大きな波を起こし、河の砂等を巻き込んで墓を作った。ひどい風雨にあい、龍母の墓は河の北側に移った。その後洪水が来る度に、墓の周りは水没し、濁った水に覆われたが、墓前の数尺の水は清らかなままだった。墓の南に山があるが、雨が降る前には必ず先に雲がでてくる。また樹木が茂り数百年の老木もあるが、人々は祟りを畏れ、伐採を嫌がる。地元の人々は、夫人の神霊が宿っていると言い伝えている。

夫人の本当の姓は蒲で、誤つて温と書く。その墓は靈溪（端溪・徳慶の南、西江の支流のひとつである靈溪水）の水口にあるが、靈溪のもう一つの名が温水であるので、夫人の姓も温としたようだ。ある説では、温は媼の訛りであるともされる。夫人の故称は蒲媼であり、又媼龍とも称す。唐代の李紳の詩には「風水に恐れ多く、媼龍に捧ぐ祈りの言葉」というが、媼は龍を生む者ではない。大きな卵を得て世話をしたところ、龍子が生まれたのだ。飲食をさせて養い、龍子は大きく成長した。つまり古代の參龍氏（龍の飼育役）のようなものである（点線）。始皇帝はこれを不思議に思い、使者を派遣して媼を迎えようとした。かつて徐福から「海神の使者は銅色の龍の形をしており、光は天を照らすほどだ」と聞いていたので、媼が龍の仲間だと思つたのだ。三神山に辿り着こうにも、風に曳き戻される。皆龍の仕業だと思つたに違いない。

この話では、後半の人名に対する解釈等は①②と異なるが、主な内容に変化はなく、二話と同類であることが分かる。広東出身である撰者は、解説の中で、史記や唐詩等の文献を引用しながら、温媼は參龍氏（龍を飼育する人）であり、海神の使者でもあると説明している。しかし、龍母墓に関する詳細な記述は、大変興味深い。洪水が来て、周辺の水が濁つても、墓前の数尺はきれいなままであり、墓の南側の山は、雨天の際必ず他の山より

先に雲気が上がるといふ。また、龍母墓の周りに繁った百年以上の老木は龍母の神霊であるため、伐採することを禁止しているとされる。秦の始皇帝時代から近代まで続く、地元の人々の龍母信仰の姿がそこにある。^①

三 〈生卵型〉 + 〈拾卵型〉の混在する龍母卵生説話の諸相

『南越志』(①の出典)より百年近く早い時代に成立した書物に、やや異なる様相の卵生説話がある。それは晋・張華撰『博物誌』巻八「異聞」の〈徐偃王〉である。

④徐偃王志云、徐君宮人娠而生卵。以為不祥、棄之水濱。独孤母有犬名鵠蒼、獵於水濱。得所棄卵、銜以來歸。独孤母以為異、乃覆暖之、遂孵成兒。生時正偃、故以為名。徐君宮中聞之、乃更錄取收養。長而仁智、襲君徐国。後鵠蒼臨死、生角而九尾、実黄龍也。偃王葬之徐界中、今見有狗壟云。

徐国の宮人が妊娠して卵を生んだが、不祥として水辺に棄てられた(二重線)。独孤母という老婆は鵠蒼という名の犬を飼っていたが、この犬が卵を見つけ、くわえて帰ってきた。独孤母は大変不思議に思ったが、覆うようにしてその卵を暖めたところ、遂に孵化して子どもが生まれた(傍線)。生まれた時がちょうど昼頃だったため、「偃」と名付けた。宮中ではこの話を聞きつけ、引き取って養育することになった。偃は成長し、仁義と英知に溢れた大人になったため、徐国の君主として跡を嗣いだ。後に、あの犬の鵠蒼が死ぬ前、角が生え九つの尻尾を持つ黄龍に変身したという(波線)。又偃王が亡くなつてから、徐の国の界に葬ったが、今もそこに狗の墓があるという。

「徐偃王」が流布する地域は、嶺南地域ではなく、淮河流域の下流に位置する徐の国(現在の安徽省洪沢湖周辺)である。本話は、徐君の宮人が妊娠して卵を生む(卵を生む生卵型)の卵生伝説である。水辺に棄てられた卵は、鵠蒼という名の犬を飼っていた独孤母に拾われ、立派に育てられる。すなわち話の後半は(卵を拾う養母型)に

属すのである。また、本話には龍蛇類の子どもというモチーフが存在しないが、卵を発見した犬が死ぬ前、角が生え九つの尻尾を持つ黄龍に変身した箇所に、龍族との関わりが窺われる。

このように生母と養母の両話型が同時に登場する説話は、朝鮮半島にも数多く見られる。代表的なものは、古代高句麗の話、六世紀頃北齊・魏收撰『魏書』卷百「高句麗伝」に所収する（朱蒙）である。

⑤語高句麗者、出於夫餘。自言先祖朱蒙。朱蒙母河伯女、為夫餘王閉於室中。照為日所、引身避之、日影又逐、既而有孕。生一卵、大如五升。（中略）其母以物裹之、置於暖処、有一男破殼而出。及其長也、字之曰朱蒙。（中略）棄夫餘東南走、中道遇一大水。欲濟無梁。夫餘人追之甚急。朱蒙告水曰、我是日子、河伯外孫。今日逃走、追兵垂及、如何得濟、於是魚鼈並浮為之成橋、朱蒙得渡。魚鼈乃解、追騎不得渡、朱蒙遂至普述。

高句麗の初代の王・朱蒙の母は河伯の娘である。夫餘王に室の中に幽閉され、日の光に当ることで妊娠し、一つの大きき五升あまりの卵を生んだ。その母が卵の上に物掛けをして、暖かいところに置くと、一人の男子が卵の殻を破って出てきた。成長した彼を、朱蒙と名付けた（傍線）。（後に夫餘王に嫌がられ、殺されそうになったため、母親の助けで）宮中から東南に逃げたが、その途中大河が道を塞ぎ、夫餘王の兵が後ろに迫ってきた。その時、朱蒙は河に向かつて、「私は天帝の子どもで、河伯の孫でもある。今日逃走を図ったが、兵に追いつかれそうだ。何とか助けてくれ」と叫んだ。そこで魚や鼈が水面に浮んで橋を作り、朱蒙を渡して後、ばらばらになった。追手は河を渡ることができず、朱蒙は無事普述に辿り着いた。（波線）。

この朱蒙に関する最古の記録は、三九一年頃成立の広開土大王東明・朱蒙碑（いわゆる好太王碑）の碑文である。¹³⁾

⑥唯昔始祖鄒牟王之創基也。出自北夫餘天帝之子、母河伯女郎。剖卵降世、生而有聖德。(中略)巡幸南下、路由夫餘奄利大水、王臨津曰、我是皇天之子、母河伯女郎。鄒牟王為我連葭、浮龜應聲即為連葭。浮龜然後造渡。於沸流谷忽本西城山上、而建都焉。不樂世位、因遣黃龍來下迎王。王於忽本東、履龍須昇天。

鄒牟王(朱蒙の同音字)は、その出自は北の夫餘王・天帝の子であつて、その母は水神・河伯の娘である。卵の殻を破つて世に降り、徳のある人として生まれた(傍線)。王位についたが、最終的に王位に執着がないため、天から黄龍が王を迎えにきた。そこで朱蒙は昇天したという(波線)。

朱蒙は母・河伯の娘(水神の娘)が産んだ卵から生まれた、龍の子孫である。本話には卵を拾う養母の姿はない、生卵型だけの龍母卵生説話である。

一方、以下に記す一一四五年成立の高麗・金富軾撰『三国史記』卷一「新羅本紀」所収〈解脫王〉の話は混合型の卵生説話である。

⑦語解脫尼師、姓昔。初其國王娶女國王女為妻。有娠、七年乃生大卵。王曰、人而生卵、不祥也。宜棄之。其女不忍、以帛裹卵。並宝物置於櫝中、浮於海、任其所往。至金官国海辺。金官人怪之、不取。又至辰韓阿珍浦口、是始祖赫居世在位三十九年也。時海辺老母、以繩引繫海岸。開櫝見之、有一小兒在焉。其母取養之、及壯、身長九尺、風神秀朗、智識過人。或曰、此兒不知姓氏。初櫝來時、有一鵲飛鳴而隨之、宜姓鵲字、以昔為氏。(中略)至南解王五年、聞其賢、以其女妻之。(中略)先王願命曰、吾死後、無論子婿、以年長且賢者繼位。是以寡人先立今也、宜伝其位焉。

解脫尼師の姓は昔である。初め国王は女国の王女を妻として娶つたが、妊娠して七年目、ようやく大きな卵を生んだ。

王は「人間が卵を生む事は不祥であり、その卵は棄てるべきだ」と言った。その王女は情にあつかったため、帛で卵をつつみ、宝物と一緒に蓋のある筥に入れ、海に流した（二重線）。それは金官国の海辺に流れ着いたが、金官の人は怪しいと思ひ、受け入れなかった。その後、辰韓の阿珍浦口に流れ着いた。ちょうど始祖・赫居世王の在位三十九年の時である。その時海辺に老母がいて、縄を繋げて筥を海岸の方に引き寄せた。筥を開けてみると、一人の小さな児が中に入っている。老母は子どもを引き取って養うことにした。その子が成人になると、身長九尺余り、気質は大変優れ、智慧や見識も普通の人より遙かに上となった（傍線）。ある人が「この児の名前は分からない」と言ったが、初め、筥が流れ着いた際、一羽の鵲が鳴いて飛びながら彼の後ろについてきたこともあつて、鵲という姓にすべきということで、昔という氏にした。南解王の五年頃に、彼の賢しさを聞き、南解王は娘を彼の妻として送った。なお先王は遺言として「私が死んだ後、子や婿を問わず、年長にして賢い者に位を継ごう」と言い、王位を娘婿の彼に譲ったという（波線）。

本話でも、南方の女人国の王女が妊娠した後、大きな卵を生む。この卵は国王に不吉と判断され、綺麗な箱に入れて、海に棄てられた。その後辰韓の阿珍の浦口に流れついた箱は、海辺の老母に拾われた。その箱から出てきた男子が龍の子かどうかは明記されないが、後に王女と結婚して王位を継ぐことから、龍王の血脈を引いていると理解できる。王権と卵生の両要素が揃う異常誕生説話は、王権と龍等水族との深い関わりを示しており、特に東アジアや朝鮮半島の卵生説話にはその傾向が強い。⁽¹¹⁾

このように環東シナ海の淮河近くの洪沢湖と朝鮮半島には、〈卵を生む生母型〉と〈卵を拾う養母型〉の混在する卵生説話が存在することが分かる。しかも卵から人間の姿の子ども（後の王）が生まれるのであつた。これら混在型の卵生説話の中には、直接龍母や龍子といった表現が使用されることはないが、卵を拾った犬が最後に龍の姿になるという独特の展開も、卵に感化されたのか、老母と共にともと龍母的要素を含んでいたのか、いろいろな想像をかき立てるもので、大変興味深い。

なお、王権とは関係が無いが、卵から人間の姿で生まれ、養母に育てられた者が水を支配する能力を持つ説話もある。晋・干宝撰『搜神記』巻十四の「擻兒化蛇」の話である。

⑧晋懷帝永嘉中、有韓媪者、於野中見巨卵、持歸育之、得嬰兒、字曰擻兒。方四歲、劉淵築平陽城不就、募能城者。擻兒応募、因變為蛇、令媪遺灰誌其后。謂媪曰、「凭灰築城、城可立就」。竟如所言。淵怪之、遂投入山穴間、露尾數寸。使者斬之、忽有泉出穴中。匯為池、因名「金竜池」。

晋の懷帝・永嘉年間（三〇七〜三二二年）に、韓という老婆が、野原で大きな卵を見つけた。持ち帰って育てると嬰兒が生まれたので、「擻兒」と名付けた（傍線）。擻兒が四歳になった頃、当時の君主劉淵が平陽（現在の山西臨汾市の西）に築城を行ったが、なかなか上手くいかず、城を作る匠を募集することとなった。そこで擻兒が応募し、蛇に変身して、後ろに従わせた老婆に這った跡に灰を播いて、印を付けさせた。更に老婆に「灰の跡に城を築けば、必ず建つ」と言った（波線）。言われたとおりにすると、本当に城が建った。劉淵はこのことを怪しく思い、蛇（擻兒）を山の穴に投げ込んだ。蛇の尻尾が数寸ほど穴の外に残ったため、使者がそれを斬り取ったところ、突然穴から泉が湧出し、集まって池となった。名前を「金竜池」と言う（点線）。

本話は帝王異常誕生譚とは全く無縁であるが、巨大な卵から生まれた子どもには水神の色合いが濃厚である。すなわち卵から生まれた子どもは龍蛇の子孫（化身）であるが故に、水源を知り、井戸を掘ったり、城を建築する技術に長けている事を窺わせる¹⁵⁾。

④から⑧のような出典がはっきりしている卵生説話の例は、いずれも四〜六世紀の間に成立したもののだが、環東シナ海中心の地域に流布していることに注目したい。なぜ秦・漢頃の話とされる（卵を拾う養母型）の龍母卵

生説話は、華南地域を舞台としたのか、なぜ北方では〈卵を産む生母型〉と〈卵を拾う養母型〉の混在型の伝説になるのか。そこには、西の異民族が次第に中央政権を取るようになり、また度重なる戦乱により諸民族が大移動したことが関連するものであろう。この後詳細に述べるが、南方系の龍母卵生神話を伝える民族の存在が大きな意味を持っている。

四 チベット高原及びその周辺の龍母伝説

前述した中国の南方、特に珠江流域を中心に見られる〈卵を拾う養母型〉の龍母伝説は、秦・漢時代の頃とされるため、古態を残していると考えられる。この地域は古くから文字を持たない故、今日確認できるものは類書に残される断片的な地方志の記録以外、僅かに六朝の古小説や隋・唐代以後嶺南地方に流罪された一部の知識人によつて著されたものである。そもそも中国の資料編纂は、高文化である漢民族の政権を中心に史料を記すものだと考えて薦められる。唐代以前の嶺南地域は未開化の地であるため、漢民族政権にとっては、単に珍物等を献上する附屬国に過ぎず、まとまった「文献」とされることはなかった。今日に至っても、西南地域に住む各少数民族の伝承は、口頭的な資料が多いのもそこに一因がある。

それらの要因があるにもかかわらず、今日まで東南アジアや中国の西南少数民族に〈卵を拾う養母型〉の龍母伝説が、長く言い伝えられ、広い地域に信仰される理由は、一体何故であろう。以下様々な角度からその理由を探ってみたい。

まず中国の西南少数民族地域に目を向けたい。チベット高原の諸々の山脈から溶けた雪水は、北や東に流れると、揚子江（中国は長江という）となる。西南方面にもいくつもの大河があり、最後は珠江となつて南海に注ぐ。この広大な珠江流域は、地理上独立した文化圏を持っている。この文化圏に中国最大の少数民族である壮族（百越の一つ）の先祖が代々生活している。壮族はおよそ二千年前から、西は雲貴高原と繋がり、北は五嶺山脈が横

たわり、中部には広西壮族自治区と広東省の二つの丘陵が弧を描いて連なり、多くの山脈に囲まれた華南地域と珠江流域で暮らしていた。この地域の山間部には多くの河川が流れており、南盤江、北盤江、紅水河、左江、右江、柳江、漓江、桂江の他、西江、東江並びに北江の三江を合わせて「珠江水系」と呼ばれている。この珠江流域は亜熱帯に属し、雨期と夏が同時にやってくるが、それは動植物の繁殖及び生物の多様化に役立っている。

また、この地域には百越の一支である水上生活者「蛋民」(蚺・蟹とも書く。本稿では文献の引用時にはそのままとし、以下蛋と通称す)が暮らしている。「蛋民」は現在も主に南海の近海地域、又揚子江流域以南の内陸の河川や東南アジア各地で生活している。彼等は主に真珠養殖業や漁業、また水上運輸業に従事する。その多くは先祖代々水上生活を続けているが、今日中国国内の蛋民は舟の暮らしを放棄し、上陸して住む人が増えた。¹⁰⁾

百越文化圏の蛋民は漁撈民であるが故に、水界への異境訪問譚や水族(龍・蛇・亀・蛙・魚・貝類等)との異類婚姻譚等の伝承を数多く保有している。¹¹⁾水辺が生活圏であるため、卵生の特性をもつ水中両生類に関する伝承も不可欠となり、自らを龍蛇・蛙・鳥(特に鵜)の子孫、先祖は卵生だつたと語ることもあるが、これらはこの地域特有のトータル信仰と結びついている。百越の蛋民とそれに関連した卵生説話については、後に詳しく論じる。

以下では巴蜀地域を中心に、また百越文化圏各地に多く見られる龍母伝説を、時代順に追って考察してみたい。

中国西南少数民族の始祖神話に関する古記録の中で、始祖は龍蛇である伝説が数多く見られる。まず六朝・劉宋の范曄撰『後漢書』巻一一六に所収する「西南夷」(夜郎国の竹王)の話を見てみたい。

⑨夜郎者、初有女子浣紗於遼水。有三節大竹流入足間、聞其中有号声、剖竹視之、得一男兒。歸而養之、及長有才武、自立為夜郎侯。以竹為姓。漢武帝元鼎六年、平南夷為牂柯郡。夜郎侯迎降、天子賜其王印綬。後遂殺之。夷獠咸以竹王非血氣所生、甚重之、求為立後牂柯太守。(中略)今夜郎県有竹王三郎神、是也。

西南の遠い夷・夜郎県では、その祖先にあたる女子が川で紗を洗っていると、突然三節の竹が足の間に流れ入った。竹の中から泣き声が聞えてきたので、剖つて見ると、一人の男の子がおり、それを連れて帰つて育てた。頭も良く武術にも長けて成長し、自から夜郎侯と名乗り、竹をもって姓とした（傍線）。漢武帝元鼎六年、西南地区の別の蛮夷との戦いの際、夜郎侯はこれを迎え撃ち、天子から王の印綬を授けられた（破線）。後に殺されるが、地元の諸夷から不思議な出生譚により尊敬されたため、夜郎県の竹王神として祭られたという。

この話はどこか日本の桃太郎の伝説を想起させる。また同書同巻の続きにある〈哀牢王〉の話に哀牢夷の始祖の不思議な誕生神話が見える。

⑩哀牢夷者、其先有婦人、名沙壹。居於牢山、嘗捕魚水中。触沈木若有感、因懷妊十月、産子男十人。後沈木化為龍出水上、沙壹忽聞龍語曰、若爲我生子、今悉何在。九子見龍驚走、獨小子不能去。背龍而坐、龍因舐之。其母鳥語、謂背爲九、謂坐爲隆。因名子曰九隆。及後長大、諸兄以九隆能爲父所舐而黠、遂共推以爲王。後牢山下有一夫一婦、復生十女子。九隆兄弟皆娶以爲妻。後漸相滋長、種人皆刻畫其身象龍文、衣著尾。九龍死、世世相繼。乃分置小王、往々邑居、散在谿谷、絕域荒外。（中略）漢武十三年、其王賢栗遣兵、乘箬船、唐・李賢注、竹船、南下江漢。

哀牢族の婦人が水中で魚を捕っていると、沈木に触つて感応し妊娠、男子十人を生んだ（傍線）。沈木は龍に変身し、水面に現われた。九人の子どもが怖がり逃げ去つたが、未つ子だけは残り、父親の龍は背中向きのその子を舐めた。後に兄達は彼が父龍に舐められて、その上賢いため、哀牢の王として推した（波線）。山の麓の別の氏族の娘と結婚して、子孫は繁栄したが、哀牢山の一族はみんな体に龍の模様を文身している。その上代々絶域の山間谿谷に暮らし、王を継承していくのだという。

本話でははっきり先祖が龍の子孫だと明記され、体に龍の模様の入れ墨をし、しかも代々その小王を引き継ぐという。また母親の言葉は役人も分からないほど難解な鳥語のようなもの(点線)である。¹⁸⁾後に漢武帝の南征を手伝うため、竹船を使って江(江水、現在の湖南省と四川省の界にある。巫山あたり)漢(漢水、古群柯郡にある川の名。現在の貴州省六盤水市付近)に南下し(破線)、戦闘に参加したとも記される。彼等はやはり内陸の水上市生活者、いわゆる漁撈民である。

ほぼ同時代の梁・任昉撰『述異記』巻下にも「哀牢王」の話が収められている。その冒頭に「哀牢夷、西蜀国名也」と、哀牢夷は西の蜀地の国であると記してある。それは現在のラオス・ミャンマー・中国の雲南省・四川省のそれぞれの一部に該当する。¹⁹⁾

二話はいずれも沈木や竹の空洞から龍蛇の子孫たちが生まれる話型であり、しかも後に地元の王や神様として崇められる。間接的な卵生説話ではあるが、水辺にいた処女が木に触れて妊娠し、人態である龍蛇の子孫を生む(卵を産む生母型)と、流れてきた竹の筒の中に男の子がいる(卵を拾う養母型)の変容した説話と捉えられる。

一方水辺の処女が妊娠した後、人間を生むのではなく、「蛟子」「龍子」といった水中の生き物を産む伝説も、南中国各地によく見られる。紀元九八三年頃に勅撰された宋・李昉等撰『太平御覧』巻九百三十一「鱗介部二」(龍)に、伝陶潜撰『続搜神記』収録の「長沙女」の話が見える。

①続搜神記曰、長沙有人、忘其姓名。家住江辺、有女子渚次澣紗。覺身中有異、復不以為患。遂妊身、生三物、皆如鯁魚。(女以己所生)甚憐之、乃着澡盤水中養之。經三月、此物遂大、乃是蛟子。(各有字)大者為當洪、次者名破阻、小者名撲岸。天暴雨、三蛟一時俱出、遂失所在。後天欲雨、此物來。女亦知其當來、便出望之。蛟子亦出頭望母、良久方復去。經年此女亡後、三蛟子至其墓所哭之、經日乃去。聞其哭声、状如狗号。

(括弧内『太平広記』巻四百二十五「龍八」の同話により補足したもの)

水辺の家に住む女子が川で紗を洗濯していたところ、体に異変を感じ妊娠したという。後日三匹の鯰のようなものを産んだ。自分が生んだものだから、大事に水盥に入れて育てた。三日月経つと大きくなり、蛟子となった(傍線)。三匹にそれぞれ名をつけたが、ある暴風雨で一斉に出ていってしまい、行方が分からなくなった。しかし後に雨が降る日に蛟子は必ず現われ、母親も予知したようにいつも川岸で待っていたという(波線)。後女が亡くなり、三匹の蛟子が墓参りにきて、墓の前で何日も犬が吠えるような泣き声で泣いたという(傍線)。

「長沙女」の話には、蛟龍の子を生んだ女が最終的に人々から祀られたとの記述がない。しかし、本話は湖南省長沙に流れる湘水に伝わる話であり、前出の嶺南地域①②③の「龍母伝説」とも共通項が多く見られる。生母が産んだのは卵ではなく水中の生き物(蛟子)であること、雨風の日に決まって母親を会いに来ること、亡くなった母親の墓参りに来ること等は、龍母伝説と重なるのである。

なお、前出の三話で、龍母が上京する際に、船が引き帰った全義嶺という場所は、今日の桂林の近郊あたりに相当する。長沙と桂林はとりの郡であり、しかも秦の始皇帝の時に作られた最古の人工運河・靈渠が、湘江の支流から水を引き、のぼり水門を利用して、行き来可能となる内陸の水運ルートとなっていた。靈渠は古くから五嶺の内外に連がる大事な水路であり、戦略的な運送水利設備でもあった。この水路の周辺に生活していた水上生活者たちには、独特な龍母伝説が伝わっていたのかもしれない。

時代が下ると、卵生神話は、次第に特殊な人物や偉人等の異常誕生譚へと変容していく。宋代の『太平広記』巻四一八「龍部一」に「張魯女」という話が所収されている。この話は後漢の有名な五斗米道(天師道)創始者張陵の孫・張魯の娘にまつわる話²⁰⁾であり、『道家雜記』という道教の書物から引用されたものである。

②張魯之女、曾浣衣於山下。有白霧濛身、因而孕焉。恥之自裁、將死、謂其婢曰、我死後、可破腹視之。婢

如其言、得龍子一雙、遂送於漢水。既而女殯於山、後數有龍至、其墓前成蹊。出道家雜記

張魯の娘は巴蜀・梁州の女郎山の麓で洗濯した際に、白い霧が体を覆い、孕んだという(傍線)。妊娠したことを恥しく思い自害するにあたり、「私が死んだ後、腹を割けて見なさい」と奴婢に言った。婢が言われたとおりにすると、龍子二匹を得たが、後にその龍子たちを漢水(漢水、古牂柯郡にある川の名)に送り届けた(波線)。その女を埋葬した山に、龍たちは度々やって来て、母の墓参りをしたため、墓の前に道ができたという(傍線)。

水辺で洗濯していた少女が龍の子を孕むことは、⑩『後漢書』「西南夷」の哀牢族の九龍の話と似通う。また亡くなった母の墓参りは、①②『南越志』の龍母伝説と共通する。

水辺にいた処女が不思議な形で妊娠し、龍蛇の子孫を生む逸話が、華南・西南地域に数多く語られているのは、南中国の河川中心に暮らしていた百越の子孫「蛋民」と何らかの関係があると考えられる。彼等の水上移動によって各地に広く流布した可能性は否定できない。

清代の『康熙字典』には「蛋、字彙補。徒歎切、音但。古作蜃」とあり、「蛋」は古くには「蜃」と書くという。「蛋」は龍蛇族の意味を持つ。清・屈大均撰『広東新語』には「蛋家艇」という記事がある。「諸蛋人以艇為家、是曰蛋家。」(中略)「蛋人善没水、昔時稱為龍戸」とあり、蛋家と呼ばれる人々は、艇という小舟の中に暮らし、潜るのに長けていて(点線)、昔から「龍戸」と呼んでいたという。

彼らが文献に現れる最古の記録としては、晋・常璩撰『華陽国志』卷三「蜀志」(広都県)がある。

【漢時県民朱辰、字元燕、為巴郡太守。甚著德惠。辰卒官、郡獯民北送及墓。獯・蜃鼓刀辟踊、感動路人。】

ここに、巴の蛮人獯・蠻民らは、なくなった巴郡（現在四川省の重慶市周辺）の太守・朱辰の葬式のために、刀を振り回しながら踊り、道ゆく人々を感動させたとある（点線）。

この記録によれば「蟹」は漢代の時、巴蜀地域に暮らしていたという。

しかし六朝梁・任昉撰『述異記』巻上所収の「合浦珠市」の話には、南海や呉越の周辺地域の蛋民という海人集団の事を記している。

【越俗以珠爲上宝。生女謂之珠娘、生男謂之珠兒。吳越間俗説、明珠一斛、貴如王者。合浦有珠市。】

南海越の人々は真珠を上級な品物とし、子どもの名前にも珠をつける。それに合浦には珠市があるという。

合浦（現在広西壮族自治区合浦市）は古から真珠の名産地であり、穀物類はとれず、海からは真珠がとれるのみである。交趾（現在のベトナム北部の一部も含む）と隣接するため、交趾との貿易により食料品等を購入したという。『史記』巻一二九「貨殖列伝」にも記録がある。

【蒼梧以南至儋耳者、與江南大同、俗而揚越多焉。番禺亦其一都會也。珠璣犀瑇瑁果布之湊。（中略）楚越之地地大人希。飯稻羹魚、或火耕而水耨、果臝・贏蛤、不待賈而足。（中略）是故江淮以南無凍餓之人、亦無千金之家。】

蒼梧（現在広西壮族自治区桂林と梧州の間）より南の儋耳（現在の海南島海口市の西）までの地域には、真珠・犀角・瑇瑁・果物・布等を扱う港がある（破線）。面積が広く、住人が少ない上に、飯・稻・魚・果実等物産が豊富で、買う必要が無い（傍線）。そのため飢えや寒さで死ぬ人が居ない（点線）。

更に宋・范成大撰『桂海虞衡志』「志蛮」篇にも、合浦の蛋民について詳細に記録している。

【广西経略使、所鎮二十五都、其外則西南諸蛮。(中略)常有事於其地者數種。曰洞・曰獠・曰黎・曰蠻、通謂之蛮。(中略)蠻、海上水居蛮也。以舟楫為家、採海物為生、且生食之。入水能視。合浦珠池蚌蛤、唯蠻能没水採取。】

宋代には、广西経略使が管轄した西南諸夷の中、「蠻」という蛮夷を含んでいた(傍線)。蠻は海上に水居し、船を家とし、海産物を取って生活する。しかも海鮮を生食する。更に蠻だけ深い水中に潜り、蚌や蛤の中から真珠を取ることができる(破線)。

同じく嶺南の風土を紹介する宋・周去非撰『嶺外代答』卷三「外国門下・蠻蛮」にも、蠻の種類や言語等が記録されている。

【蟹蛮、以舟為室、視水如陸、浮生江海者、蟹也。欽之蟹有三、一為魚蟹、善拳網垂綸。二為蠔蟹、善没海取蠔。三為木蟹、善伐山取材。凡蟹極貧……語似福・広、雜以広東・西之音。】

欽州(現在の広西壮族自治区欽州市周辺)に住む蟹は、「外国門」に分類されている。一は網で魚を取る蟹、二は海に潜って牡蛎等貝類を取る蟹、三は山で山林の木材を伐る蟹とする。すべて極貧の生活をしている(傍線)。欽州の蟹民の言語は福州(閩南語)・広州(広東語)に似ていて、又広東及び広西の発音(粵語)も混ざっている(点線)。

かつて蛋家研究の第一人者・張寿祺氏は「福建沿海地域の蛋民は福州・閩南語、広東や広西・欽州に住む蛋民

は広東語等を話す」といい、南中国の言語ができる中国人であると指摘している。⁽²³⁾

なお蛋民の信仰について、明・宋応星撰『天工開物』下巻「珠玉第十八」には、次のように書かれている。

【蜃戸採珠、每歲必以三月、時性殺祭海神、極其虔敬。蜃戸生啖海腥、入水能視水色、知蛟龍之所在。】

海の民として、毎年の三月には必ず動物の生け贄を持って海神を祀り、その態度は極めて敬虔である（二重線）という。また海鮮類を生で食し、水のことをよく知り、蛟龍の居場所を熟知するという。

なお、彼らが祭っている神は蛇である。明・鄺露撰『赤雅』卷上「蜃人」にある。

【蜃人、神宮画蛇以祭、自云龍種。浮家泛宅、或住水許、或住水欄。捕魚而食、不事耕種、不與土人通婚。（中略）籍稱龍戸、莫登庸其産也。】

蜃は神宮に蛇の絵を飾って蛇神を祀り、自らを龍の子孫の「龍種」であると言う（太線）。水上に住居を構え、或いは水辺の高床式の家（干欄と言ふ）に住む漁民である。魚を捕って食べ、田植え等の農作業はできない。しかも陸地の人との婚姻は禁止され、税金も払わない、その子どもは公に採用されることがない賤民である（傍線）。

「蛋民」と呼ばれる漁撈民集団は、かつて華東及び華南、南海の沿海地域から西南部の内陸河川の水上にかけて生活する人々である。彼らは、龍神・蛇神信仰を持ち、主な生活地域は南海に囲まれたトンキン湾一円であり、真珠養殖を得意とするものである。現在もベトナム北部や広西壮族自治区の北海・合浦・欽州付近、また北部の三江、中部の柳江等の河川でも、「蛋民」と呼ばれている水上生活者が見られる。⁽²⁴⁾

東南アジア各国にもこのような水上生活者は暮らしており、そこにはメコン川が存在する。メコン川は中国青海省発祥地の札阿曲江から始まる、長江、黄河につぐアジア第三の大河である。南シナ海に注ぐメコン川は、中国の雲南省では瀾滄江と呼ばれる。ミャンマーに入るとメイ・カウン・ミエツ、またラオスではメナム・コン、更にカンボジアではトンレ・メコン、そしてベトナムではソン・クローンとなる。ベトナム語のソンは「川」、クローンは「九龍」、つまり九匹の龍になぞらえている。この地域は民族・言語も共通するため、前出の『後漢書』卷一六「西南夷」所収する哀牢族の始祖誕生譚〈哀牢王・九隆（龍）〉⑩の話とも何らかの関係をもつことが考えられる。

以下、メコン川流域周辺の国々に見える龍母伝説の他の例を拾ってみた。

ベトナムを始め、カンボジアやミャンマーも、始祖王や水神等の出自が卵生であるとする伝説が多い。まずベトナムの例から紹介したいが、始祖卵生説話は下編で詳細に論じるため、ここでは『大南一統志』に所収される「三位水将祠」の水神卵生誕生の話⁽⁹⁾を上げる。

⑬在榮和県愛義社醉翁山之南、有一湖、水極深。中一小埠、靈祠在焉。伝伊社人名黃璘、妻阮氏、道爲巫。年過五十、未有孕育。一日氏浴於湖、夜夢湖中越波、若有龍形交繞、驚醒感而孕、弥月產出三大卵。黃璘怪之、作竹筏、送之江中。至青霞社、忽有風雨、化作三蛇登岸。社人致礼送之、(中略)後日長大、每出湖、輒風雨。托童子称三位水将。第一黃湛、第二黃波、第三黃滑。郷人立廟祀、最著靈応。

ベトナムの榮和県・愛義社の醉翁山の南麓に、湖があつて、湖水の深さは相当なものであつた。湖中に一つ小さな丘があり、靈なる祠が建つていた(点線)。伝えるところによると、伊社の人黄璘という人の妻、阮氏は巫女業をする人であつたが、年が五十歳を過ぎてても、なお妊娠することがない。ある日阮氏は湖に入り水浴びをした。その夜、夢で湖に波が立ち、龍の形となつて阮氏の中に流れ込んできた。驚いて目を醒ますと、何かを感じたように妊娠していた。い

よいよ臨月になり、三つの大きな卵を産み落とした。黄璘はそれを怪しげに思い、竹の筏を作り、その卵を水中に送り返そうとした（傍線）。青霞社に到着すると、突然風雨が降りはじめ、卵は三匹の蛇に変化して岸に上がった。社人は礼をして蛇等を見送った。（中略）後に大きくなった蛇たちが湖から姿を現わすたびに、たちまちに風雨になるので、童子に托宣して「三位水将」と称することとした（波線）。第一の名は黄湛、第二の名は黄波、第三の名は黄滑である。その後郷人が廟を建て祀ったが、最も靈験がある廟という。

水辺で懐妊したその母は巫女であったが、彼女が産んだ卵から蛇（水神の子ども）が生まれ、その神子を郷人が信仰するという。この話の中に登場する三匹の蛇に名前をつける場面は、前出⑩『続搜神記』所収の〈長沙女〉の話と似通っているように感じる。異なるのは本話の龍蛇の子等が「三大水将」として祀られることである。

次に元代・周達観撰『真臘風土記』巻二「宮室」に記録されるカンボジアの国王の宮室の金塔に棲む九頭蛇精の話を見たい。

⑭其内中金塔、国主夜則臥其下。土人皆謂塔之中有九頭蛇精、乃一国之土地主也。係女身、每夜則見。国主則先與之同寢交媾、雖其妻亦不敢入。二鼓乃出、方可與妻妾同睡。若此精一夜不見、則番王死期至矣。若番王一夜不往、則獲災禍。

カンボジアの国王の宮殿の中に金塔があり、王様は每晚その塔の下で寝なければならない。原因は地元の人が塔の中に九つの頭をもつ土地の主・蛇の精（太線）が住んでいるというからだ。その蛇の精は女である。每晚現われ、国主は必ず最初に蛇精と寝、交媾する。国王の本妻でさえも中に入るのを遠慮する。夜中頃になると、国王は中から出ることが許され、その時初めて妻や妾と寝ることが許される（傍線）。もし一晚中その蛇精が現われなかったら、王の死期が

来るのだ。又もし王が一夜金塔に行かなかつた場合、王室に災禍が訪れるとする。

この話は龍蛇水神との関係はやや曖昧で、王子の誕生もないが、その国の地主である九頭の蛇精の恐ろしさ、又国の生死を司る蛇神の大きな威力の後ろには、在地の神・蛇女の姿が隠れているように感じられる物語である。現段階ではカンボジアの説話に関する情報が不十分で、始祖卵生説話はいまだ発見できていない。

最後にミャンマーの卵生伝説を二話紹介したい。二話ともに三品彰英氏の「南方系神話要素」(卵生族祖神話)からの引用である。²⁶⁾一話目はメン・マト国の始祖王出自の話である。

⑮ノウン・プト湖のほとりマン・セという所に、年老いた夫婦が住んでいた。彼等はクン・アイと呼ぶ一人の息子がいる。彼は毎日牧場に出かけていて、家畜の見張りをしている。この息子年十六になった時、一人の龍姫は人の姿にして湖から現れてきた。彼と語り合ううちに、二人は愛し合うようになった。遂に龍神の国である湖の中に旅に行った。クン・アイはここで歓待を受け、幸せな日々を送っていた。ところで、ある日この国の祭りに当たり、姫をはじめ國中の人々はすべて龍の元の姿で現れ、彼は大変驚いた。そこで彼は自分の国に帰りたいと申し込んだ。姫はクン・アイの気持ちを察して、彼の願いを許した。彼を湖のほとりまで送り、自ら卵一つを生み、その卵から男の子が生まれることを告げた。もしいつか親子に危険な事が生じた場合、手に地面を打てば、彼女は必ず現れ、その危難を救うべき事を約束した。こうして彼女は湖の中の龍神の国に戻った。ここにクン・アイはノウン・プト湖のほとりに、枯れ葉を集めて、その卵を掩い置くと、まもなく男児が生まれた。名をチュン・カアムと呼ぶ。チュン・カアムは、後にメン・マオの王位につきて、七十二年の治世をしていた。

この話の前半は、どこか日本の浦島太郎の話に類似しているが、龍姫との間に卵を生んだことやその卵から男の子どもが生まれたことは、日本の浦島説話にはないモチーフである。本話はいわゆる一種の水中異界への訪問譚であり、又龍姫との異類婚でもある。更に龍の子孫が卵生し、後に王位も継ぐすべての卵生説話の要素を含んでいる。⑤⑦に挙げた朝鮮半島の卵生神話と共通しているところに注目すべきである。

二話目はパロウン族の始祖王卵生の伝説である。

⑩モゴーク丘の靈湖にササンデイという一人の龍姫がいる。天帝の御子のスリヤと契り、三個の卵を産んだが、忽にこの日の王子は父王・日帝に呼び戻された。(中略)龍姫は怒って二個の卵をウラワヂ河に投げ捨てた。もう一個の卵は河の上流のマン・モウに漂い着き、そこで植木屋の夫婦が拾い上げた。この夫婦は珍しいものだと思い、黄金の箱に納め置いた。やがて一人の男児がその卵から生まれた。この子はウディブウ(即ち卵より生れたもの)と呼ばれた。彼は成人してから、中国と境のシャンの一酋長セ・ランの王女と結婚して、二人の王子を設けた。弟は中国の天子となり、ウディブウ(即ち卵より生れたもの)の称号をもらった。このウディブウの称号は今日までビルマ人たちの中国帝王に与えるものである。兄はシートウン・サムサムの町を興し、ロイ・ロンの酋長となった。パロウンの酋長はいずれも彼の子孫である。

本話は丘にある靈湖に住む龍姫が天帝の息子と愛し合い、妊娠して三個の卵を産んだという話である。訳あって怒った龍姫は卵を棄て、そのうちの一つは植木屋の夫婦に拾われ、大事に育てられた。そして後に成人してシャン国の王女と結婚し、その後王位も継いだという。更にミャンマーは中国と陸続きであるため、後に二人の王子の一人・弟君は、中国の天子になったと語るところに注目したい。

何故異なる国家、地域なのに、これほど類似する話が伝えられているのか。そこには、国境にとらわれることなく活動する、古くからの漁撈民である蛋民の存在が大きく影響しているのではないか。ミャンマーは民族や言語も中国の西南少数民族・哀牢族と通じる文化圏を持つ。今日でも南方中国人とミャンマー人の血のつながりは「二卵同胞」とされ、「そなたは河上に住み、私は河下に住むもので、同じ河の水を飲む血縁の兄弟である」という歌詞は、国境近くに暮らしている老若男女はみんな知っている。

ここで、嶺南文化圏における龍母卵生説の流れを考えるため、更なる傍証となる話、ベトナムの始祖卵生神話「鴻臚氏伝」を紹介したい。『嶺南摭怪列伝』巻一所収「鴻臚氏伝」は、かつて三品彰英氏が〈卵生始祖神話〉の例話として紹介したが、全文を取り上げておらず、解釈も行われていないため、中国の龍母卵生説との関係は判然としなかった。本稿では、全文の校異、訓読をし、初めての語釈を試みた。以下篇を改めて考察したい。

下篇

五 ベトナムの始祖卵生説話「鴻臚氏伝」

『嶺南摭怪列伝』巻一所収「鴻臚氏伝」の話の概略は以下のとおりである。

中国の炎帝神農氏の三世の孫である帝明に、帝宜が生まれた。また、帝明は嶺南をまわる際に姦仙の娘と出会い、結婚して録統が生まれた。この録統は大変聡明で、父に大層可愛がられていた。帝明はこの録統に帝位を継がせようとしたが固辞されたため、その兄である帝宜に譲った。そこで録統には南方を治めるように命じ、涇陽王に封じた。治める国の名は赤鬼国と言う。その涇陽王は能く水府に出入り、洞庭君龍王の娘を娶り、息子の崇覧が生まれた。その號は貉龍君と呼ぶ。貉龍君は父に代わり国を管理し、初めて君臣・尊卑の礼儀を決め、人民に耕作を教え、国民から厚い信頼

を得た。(中略) 後日貉龍君は帝来(帝宜の子)の愛娘に出会い、一目惚れして夫婦となった。ちょうど一年が経過した頃一つの肉塊が生まれたが、不祥であるときれ、これを原野に棄てた。七日が過ぎこの肉塊から百個の卵が生まれ、その一卵から一人ずつ男の子が誕生した。百人の男のうち、五十人は父・貉龍君に属し、五十人は母・嫗姫と文郎国(現在のベトナム北部と中国の広西壮族自治区の一部)に帰した。母の国の人々は水中に魚を捕るとき、よく蛟龍の害にあっていたが、父王が龍の一族であるので、体に龍の模様を入れ墨をして、害を逃れた。それが百越人の入れ墨の風習の始まりである。

この伝説によれば、百越の始祖は、北方の炎帝神農氏の末裔と揚子江流域の洞庭湖に棲む龍王の娘の間に生まれた子孫であり、龍族の血を継ぐ者であるという。その上ベトナムの始祖王・雄王は、龍王の娘が生んだ「百卵」の中から生まれた百人の男子の一人である。しかも雄王は南下した母親と共に移動した五十人の男子から、強者として選り出した雄者である。

「鴻臚氏伝」の成立は、任明華の『越南漢文小説研究』第二節には、『嶺南摭怪』を始めとする志怪、伝奇小説の中で「不知作於何代、成於何人。意其草創於李・陳之鴻生碩儒、而潤色於今日好古博雅之君子矣」と、その成立時期及び具体的な作者が不詳であると指摘している。そこに掲載したベトナム志怪小説集『嶺南摭怪列伝』巻一(甲本)は現存する最古のものであり、およそ十四、十五世紀頃成立した。漢文で記され、中国文化の影響を色濃く見てとれるという。

なお「鴻臚氏伝」には幾つかの伝本があり、陳荆和校合本『大越史記全書』²⁸⁾にも十八世紀頃の異本を見ることができ、本稿では最も古い伝本『嶺南摭怪列伝』巻一(甲本)所収の「鴻臚氏伝」を読み解くことにした。まず本文の全文を紹介したい。なお本文校異は『新編天南雲録列傳』巻一所収「鴻臚氏伝」(出嶺南摭怪)²⁹⁾による。

炎帝神農氏三世孫帝明、生帝宜。南巡狩至五嶺。得發仙之女、納而歸。生祿統。容貌端正、聰敏夙成。帝明

奇之、使嗣位。祿統固辞、讓其兄。乃立宜爲嗣、以治北地。封祿統爲涇陽王、以治南方、号爲赤鬼国。涇陽王能行水府、娶洞庭君龍王女、生崇纜。号爲貉龍君、代治其国 (a)。涇陽王不知所之。

貉龍君教民耕稼農桑、始有君臣尊卑之等、父子夫婦之倫。或時歸水府、而百姓晏然無事、不知所然者。民有事、則揚声呼龍君曰、「逋乎何在? 越俗呼父曰逋。不能来以活我輩。」龍君即来、其靈顯感應、人莫能測。

帝宜伝子帝来、以北方天下無事、命其臣蚩尤代守国事、而南巡赤鬼国。時龍君已歸水府、国内無主、帝来乃留其愛女嫗姬與衆侍婢居行在。周行天下、遍覽形勝、見奇花異卉、珍禽異獸、犀象玳瑁、金銀椒桂、石乳沉檀、山穀海物、無物不有。又四時氣候、不寒不熱、帝来乃愛慕之、樂而忘返 (b)。南方之民、苦北方煩擾、不得安恬如初、乃相率呼龍君曰、「逋乎何在? 使北方侵擾方民。」龍君倏然而来、見嫗姬容貌奇偉、龍君悅之。乃化作好兒郎、豐姿秀麗、左右前後、侍從者衆。行歌鼓吹、虛建宮中。嫗姬悅從、龍君藏於龍岱巖。帝来還行在、不見嫗姬、命群臣遍尋天下。龍君有神通、變現万端、妖精鬼魅、龍蛇虎象、尋者畏懼、不敢搜索、帝来乃歸。再伝至帝榆罔、蚩尤作乱、有熊国君軒轅、率諸侯兵戰不克。蚩尤獸形人語、勇猛有力。或教軒轅以獸皮鼓爲令戰之、蚩尤乃驚敗於涿鹿。帝榆罔侵陵諸侯、與軒轅戰於阪泉、三戰而敗、降封於洛邑而死、神農氏遂亡 (c)。龍君與嫗姬居期年而生一胞、以爲不祥、棄諸原野。過六七日、胞中開出百卵。一卵生一男、乃取歸而養之、不勞乳哺。各自成長、秀麗奇異、智勇俱全、人々畏服、謂其非常之兆 (d)。龍君久居水国、兄弟母子独居、思歸北国。行至境上、黃帝聞之懼、遣兵禦塞外、母子不得歸。回南国呼龍君曰、「逋乎何在? 使吾母子寡居、日夜悲傷。」龍君忽来、遇於襄野。嫗姬曰、「妾本北国人、與君相処、生百男、棄妾而去、不同鞠育。使無夫無婦之人、徒自傷耳。」龍君曰、「我是龍種、水族之長。君是仙種、地上之人。雖陰陽之氣合而有子、然水火相剋、種類不同、難以久居。今相分別、吾將五十男歸水府、分治各処。五十男從汝居地上、分国而治。登山入水、有事相聞、無有相廢。」百男聽從、然後辞去 (e)。

嫗姬與五十男居峯州今白鶴巖是也。

自相推服、尊其雄長者爲主、号曰雄王、

国号曰文郎国。東來南海、西抵巴蜀、

北至洞庭湖、南至狐精国今占城是也。

分国爲十五部一作郡、曰越裳、曰交趾、曰朱鷲、曰武寧、曰福祿、曰寧海、曰

陽泉、曰陸海、曰懷驪、曰九真、曰日南、曰真定、曰文郎、曰桂林、曰象郡等部、分群弟治之（f）。置其次爲將相、相曰貉侯、將曰貉將（g）。王子曰官郎、女曰媚娘。百司曰蒲正、臣僕女隸曰稍稱一作奴婢。臣曰魂、世々以父傳子曰輔導。世々相傳、號爲雄王而不易（h）。時林麓之民漁於水者、往々爲蛟龍所害、言於王。王曰「山蛮之種與水族実殊、彼好同惡異、故相侵害」令人以墨刺画其身、爲龍君之形、水怪之狀、自是民免蛟傷之災、而百越文身之俗、蓋始於此（i）。國初民用未足、以木皮爲衣一作紙、織菅草爲席、以米汁爲酒、以枕榔棕櫚爲飯一作飲、禽獸魚鼈爲鹹、薑根爲塩、刀耕火種、地多糯米、以竹筒炊之。架木爲屋、以避虎狼之害、剪短其髮、以便山川之人、子之生也、以蕉葉臥之、人之死也、以春杵之、令隣人聞而來救、未有檳榔、男女嫁娶、以塩封爲先、然後殺牛、羊以成礼、以糯飯入房中、相食悉、然後交通（j）。蓋百男乃百越之始祖也（k）。

次は訓読文である。

炎帝神農氏三世の孫帝明、帝宜を生む。南のかた巡狩して五嶺に至る。嫫仙の女を得、納めて歸り、祿統を生む。容貌端正にして、聡敏夙に成る。帝明之を奇とし、位を嗣がしめむとす。祿統固辞し、其の兄に讓る。乃ち宜を立てて嗣と爲し、以て北地を治めしむ。祿統を封じて涇陽王と爲し、以て南方を治めしめ、號して赤鬼国と爲す。涇陽王は能く水府に行き、洞庭君龍王之女を娶り、崇纁を生む。號して貉龍君と爲し、代りて其の国を治めしむ。涇陽王は之く所を知らず。

貉龍君は民に耕稼農桑を教へ、始めて君臣尊卑の等、父子夫婦の倫有り。或る時水府に歸るも、百姓晏然として事無く、然する所の者を知らず。民に事有れば、則ち声を揚げて龍君を呼びて曰く、「連や何くにか在る？（越俗に父を呼びて連と曰ふ）来りて以て我輩を活かす能はざるや？」と。龍君即ち来り、其の靈顯感應は、人能く測る莫し。

帝宜は子帝来に傳へ、北方天下事無きを以て、其の臣蛮尤に命じて代はりて国事を守らしめ、而して南のかた赤鬼国を巡す。時に龍君已に水府に歸り、国内に主無ければ、帝来乃ち其の愛女嫫姫を留めて衆侍婢と與に行在に居らしむ。

天下を周行し、形勝を遍覧す。奇花異卉、珍禽異獸を見る。犀象玳瑁、金銀椒桂、石乳沉檀、山穀海物、物の有らざる無し。又た四時の氣候、寒からず熱からず、帝来乃ち之を愛慕し、樂しみて返るを忘る。南方の民、北方煩擾して、安恬たること初の如くなるを得ざるを苦しみ、乃ち相率ゐて龍君を呼びて曰く、「通や何くにか在る？北方をして方民を侵擾せしむるや」と。龍君倏然として来り、姫姫の容貌奇偉なるを見、龍君之を悦ぶ。乃ちかして好兒郎と作り、豊姿秀麗にして、左右前後、侍従者衆し。行歌鼓吹し、虚建宮の中。姫姫悦びて従ふ。龍君龍岱巖に藏す。帝来行在に還るに、姫姫を見ざれば、群臣に命じて遍く天下を尋ねしむ。龍君に神通有り、変現万端、妖精鬼魅、龍蛇虎象となれば、尋ぬる者畏懼し、敢へて搜索せず。帝来乃ち歸る。再た傳へて帝榆罔に至り、蚩尤乱を作し、有熊国君軒轅、諸侯の兵を率ゐて戦ふも克たず。蚩尤は獸形人語、勇猛にして力有り。或ひと軒轅に教へ、獸皮鼓を以て令と爲し之と戦はしむれば、蚩尤乃ち驚きて涿鹿に敗る。帝榆罔は諸侯を侵陵し、軒轅と阪泉に戦ひ、三たび戦ひて敗れ、降りて洛邑に封ぜられて死し、神農氏遂に亡ぶ。

龍君は姫姫と居ること期年にして一胞を生むも、以て不祥と爲し、諸を原野に棄つ。過ぎること六・七日、胞中開きて百卵を出だす。一卵一男を生み、乃ち取りて歸りて之を養へば、乳哺に勞せず。各自ら成長し、秀麗奇異、智勇俱に全し。人々畏服し、其れ非常の兆と謂ふ。龍君は久しく水国に居り、兄弟母子は独居すれば、北国に歸らむことを思ふ。行きて境の上に至るに、黄帝之を聞きて懼れ、兵を遣はして塞外に禦げば、母子歸するを得ず。南国に回り、龍君を呼びて曰く、「通や何くにか在る、吾が母子をして寡居し、日夜悲傷せしむるや」と。龍君忽として来り、襄野に遇ふ。姫姫曰く、「妾は本北国の人なり。君と相処し、百男を生むに、妾を棄てて去り、同に育てず、無夫無婦の人たらしむれば、徒自ら傷むのみ」と。龍君曰く、「我は是れ龍種にして、水族の長なり。君は是れ仙種にして、地上の人なり。陰陽の気合して子ありと雖も、然れども水火相剋し、種類同じからざれば、以て久しく居り難し。今相分別し、吾は五十男を將て水府に歸り、各処を分治せしめむ。五十男は汝に従ひて地上に居り、国を分ちて治めしめむ。山に登り水に入り、事有らば相聞き、相廢すること有る無かれ」と。百男聽従し、然る後辞去す。

姫姫は五十男と峯州（今の白鶴県、是なり。）に居り、自ら相推服し、其の雄長者を尊ひて主と爲し、號して雄王と

曰ひ、国號を文郎国と曰ふ。東に南海を夾み、西に巴蜀を抵り、北は洞庭湖に至り、南は狐精国（今の占城、是なり。）に至る。国を分ちて十五部（一に「郡」に作る）と爲し、越裳と曰ひ、交趾と曰ひ、朱慮と曰ひ、武寧と曰ひ、福祿と曰ひ、寧海と曰ひ、陽泉と曰ひ、陸海と曰ひ、懷驪と曰ひ、九真と曰ひ、日南と曰ひ、真定と曰ひ、文郎と曰ひ、桂林と曰ひ、象郡と曰ふ等の部、群弟に分ちて之を治めしむ。其の次を置きて将相と爲し、相は貉侯と曰ひ、将は貉将と曰ふ。王子は官郎と曰ひ、女は媚娘と曰ふ。百司は蒲正と曰ひ、臣僕女隸は稍称（一に「奴婢」に作る）と曰ふ。臣は魂と曰ひ、世々父を以て子に傳らしめて輔導と曰ふ。世々相傳り、號して雄王と爲して易へず。時に林麓の民の水に漁る者、往々にして蛟龍の害する所と爲り、王に言ふ。王曰く、「山蠻の種は水族と実と殊り、彼は同を好みて異を惡めば、故に相侵害す」と。人をして墨刺を以て其の身に畫き、龍君の形、水怪の状を爲さしむ。是より民蛟傷の災を免る。而かるに百越の文身の俗は、蓋し此に始まるなり。国初は民用未だ足らず、木皮を以て衣（一に「紙」に作る）を爲り、菅草を織りて席を爲り、米汁を以て酒を爲り、枕椰・櫻欄を以て飯（一に「飲」に作る）と爲し、禽獸魚鼈もて鹹と爲し、薑根もて盐と爲す。刀耕火種し、地に糯米多く、竹筒を以て之を炊く。木に架けて屋を爲り、以て虎狼の害を避く。剪りて其の髪を短くし、以て山川の入に便なり。子の生まるるや、蕉葉を以て之に臥せしむ。人の死するや、春を以て之を柩し、隣人をして聞きて来り救はしむ。未だ檳榔有らず、男女嫁娶するに、盐封を以て先と爲す。然る後に牛羊を殺して以て礼を成し、糯飯を以て房中に入れ、相食悉して、然る後に交通す。

蓋し百男は乃ち百越の始祖ならむ。

文章の冒頭に所謂血統的にベトナムの鴻龐王は、中国古代の炎帝神農氏の子孫で、黄帝と先祖を同じくすると強調されている。更に炎帝神農氏の三世孫帝明が、南方を巡狩した際に五嶺で越地の婺仙の娘を嫁とし、息子禄統が生まれたと言う。禄統は庶子だが、容貌端麗で聡明だったため帝明に可愛がれたものの、皇位継承は固く辞退し、兄嫡子の帝宜に譲る。帝宜は即位後、北方の地を治めたという。帝明と帝宜は、宋・李昉等勅撰『太平御覽』卷七八「皇王部」三〈炎帝神農氏〉に「帝王世紀曰、神農氏有聖徳、以火承木位、在南方。主夏故謂之炎帝。

〔中略〕凡八世帝承・帝臨・帝明・帝直〔本文では「帝宜」とする〕・帝来・帝哀・帝榆罔〕とあり、実在した帝王とされる。

又祿続の母親・婺仙の娘の出身地「婺」についても、『太平御覧』巻一七一「州郡部」十七〔江南道下・婺州〕の条には

【十道志曰、婺州東陽郡、禹貢揚州之域。春秋時爲越之西界。秦属会稽郡、漢初属荆吳二国。郡国志曰、婺州正得東越之地。〔中略〕州人俗輕躁、少信行、好淫祀。】

婺は古越の地であり、東越の地に属すとしている。その人は様々な神様を祀るのだという。

つまり「婺仙之女」は婺州（現在浙江省金華市の北東方面の義烏に当る）という古越の女子である。後に婺仙の娘は祿続を生んだ。祿続は成人して涇陽王に封じられ、南方の地を管理するようになる。涇陽王は水府の洞庭湖に行き、龍王の娘と結婚し、子・崇纜が生まれた。龍の子孫・崇纜は号を貉龍君と名乗り、父親に代わり国を治めた（a）の傍線。

さて貉龍君・崇纜はどんな国王であろうか。又どういう国を管理していて、その子孫はどんな暮らしをしているのか。本文を見ながら検討してみたい。

（一）貉龍君は国民に農業・養桑や君臣・尊卑・父子・夫婦等の倫理を教えていて、百姓達はみんな平穏な暮らしをしている。しかし貉龍君は時々母の国洞庭湖の水府に帰るため、民は用事があれば、大声を揚げて龍君を「お父様どこにいるや？我々を助けてくれないか？」と叫ぶと、貉龍君はたちまちにやってくるのだ。その靈顯な力はとても不思議なものであった。ミャンマーの始祖卵生神話の⑮話と共通項を持つ。

越の言葉「逋（お父様）」について調べて見ると、『漢語大詞典』は「広韻、博孤切、平模、幫」となる。本話では「父親」の意味とするが、辞書では確認できなかった。しかし劉錫嶺氏は「父、峒語、不。瑤語、布。壯語、博」と、侗族・瑤族・壯族のいずれも「pu」と発音すると紹介し、父親の意とする³⁰。侗族・瑤族・壯族は、現在中国南西地域の貴州省、広西壮族自治区、広東省、湖南省等の地方で分布している少数民族である。

(二) 本文中に「奇花異卉、珍禽異獸。犀象玳瑁、金銀椒桂、石乳沉檀、山穀海物、無物不有。又四時氣候、不寒不熱、帝来乃愛慕之、樂而忘返」(b)波線といった文は、嶺南地方の恵まれた気候と自然、なお豊富な物産と珍味等を描いている。『太平御覽』卷七八六「四夷部七」(南蛮二・烏澹)には「異物志曰、烏澹取翠羽、採珠爲産」と、烏澹(壯族の古称)に真珠、カワセミの羽毛等を産出しているとある。また宋・周去非撰『嶺外代答』にも、「食用門」「香門」「宝貨門」「華木門」「金石門」「禽獸門」等の部立があり、その中に「沉水香、檀木、真珠、琥珀、金、銀、銅、鍾乳石、芭蕉、荔枝、竜眼」等の宝物の名前が確認できる。

(三) 帝明が、南方を巡狩した際に、五嶺という地に訪問し、そこで仙女と出会い、結婚したという。実はこの五嶺は、中国の南方地域、すなわち歴史上の百越の地を指すのである。『晋書』卷十五「地理志下・交州」に、次のような記録が見える。

【交州按禹貢揚州之域、是爲南越之士。秦始皇既略定揚越、以謫戍卒五十万人守五嶺。自北徂南、入越之道、必由嶺嶠、時有五処、故曰五嶺。】

始皇帝の時代から五十万人の兵卒を派遣し、南越の交州の地にある五嶺を守らせたという(傍線)。この五嶺は五つの嶺があり、古く北から南へ、越に入る際に、必ず通らなないと行けない肝心な関所でもある(破線)。

古くから五嶺より以南の地域は「嶺南」「嶺外」とも言い、百越の南の地を指す。また南越とも称す。唐代には「嶺南道」(地方行政区画)となる。「嶺南道」は今日のベトナム北部の一部、広東省、広西チワン族自治区、海南島等の地を指す。

(四)「鴻臚氏伝」には、自ら「百越」の子孫と称し、その国土は「東に南海(現在の広東省広州市周辺)をはさみ、西に巴蜀(巴は今四川省の重慶地方、蜀は今の成都地方)を至り、北は洞庭湖に至り、南は狐精国(今の占城)に至る」(f)の二重線」という。

百越の初見は秦・呂不韋撰『呂氏春秋』巻二十「恃君覽第八」である。

【楊漢之南、百越之際。(中略)多無君。(その漢・高誘注によると「楊州漢水南、越有百種。皆南越之夷、無君也。」)】

秦代から揚州や漢水以南の地域には、百越夷の地である(傍線)。また漢・高誘注には、更に「越は百種があり。皆南越の夷であり、君長が無いのだ」と説明していた(破線)。

百越については、後漢・班固撰『漢書』巻二八「地理志・下」に詳しい。

【粵(同「越」)地、牽牛婺女之分也。今之蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・南海・日南・皆粵分也。其君禹後帝少康之庶子、云封於会稽。断髮文身、以避蛟龍之害。後二十世至勾践称王。】

今の蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・南海・日南等の地はすべて越の国土であるという。国民はみんな断髮・文身し、蛟龍の害を避けるためである(傍線)。

すなわち漢代からは蒼梧郡（現在広西壮族自治区桂林と梧州の間）、鬱林郡（現在広西壮族自治区三江侗族から柳州を含む崇左に至る地域）、合浦郡（現在広西壮族自治区欽州から広東省の台州までの間）、交趾郡（現在のベトナム北部と広西壮族自治区の一部）、九真（現在のベトナム中部）、南海郡（現在の広東省の北部と中部、及び広州市周辺）、日南（現在のベトナム南部）等の地域は、全部越の地である。

後に唐代の顔師古が「自交趾至会稽、七八千里、百粵雜処」と、交趾（現在のベトナム河内周辺）から会稽（現在の浙江省紹興市東側）までの七八千里は、百越が雑居する地域だと注をしている。

鴻臚氏伝の百越と称される地域が、先述した蛋民の移動する地域とほぼ同じであることは、特に注目すべきところである。

(五) 本文には雄王は国土を十五郡部に分け、兄弟たちと共に管理したという。この十五の郡部の、実在性及び分布範囲について、古地図と古地理書等を確認してみた。

先ず貉龍君に捨てられた嫗姫と五十人の息子（e）の波線が最初にやって来た場所は、峯州であった。

「峯州」は現在のベトナム・ハナイより北西にある地名で、秦の象郡、漢の交趾郡、唐の嶺南道に属した。『太平御覽』卷二七二「州郡部」十八〈嶺南道〉（以下全部〈嶺南道〉で記す）は、「方輿志曰、峯州承化郡、古文郎国、亦陸梁地。秦属象郡。兩漢属交趾郡。（中略）隋平陳改為峯州。煬帝初廢、唐復置峯州。」と、古文郎国であり、隋・唐から峯州として設置された。

峯州は今の白鶴県という割り注に関しては、不明である。また文郎国の範囲とされる南の狐精国（今の占城）というのは、古い国名で、現在のベトナム中南部の平定周辺に位置し、後漢から明代まで存在した地名である。

宋・趙汝適撰『諸蕃志』卷上「志国」〈交趾国、占城国〉には、次のとおり記す。

【占城東海路。通広州、西接雲南、南至真臘、北抵交趾、通邕州。自泉州至本国、順風舟行二十餘程。】

占城の東は海路となり、広州に通じる。西には雲南と接し、南はカンボジアと毗隣し、北は交趾があり、陸上で邕州に通じる。

その次に、以下の十五郡「越裳、交趾、朱鳶、武寧、福祿、寧海、陽泉、陸海、懷驩、九真、日南、真定、文郎、桂林、象郡」を調べてみた。

「越裳」は「越常」とも書き、交趾と共に古南海（現在のベトナム南境）にあった国名である。范曄撰『後漢書』卷一一六「南蛮伝」に「交趾之南、有越裳国。」とある。

「交趾」については〈嶺南道〉に「方輿志曰、安南府今理宋平県、古越地。禹貢揚州之地、號爲百越。（中略）秦屬象郡、漢爲交趾、日南二郡界。後漢因之、唐爲交州。」と、交趾は古百越の地とする。

「朱鳶・武寧」は今のベトナム北部河内市の南に位置し、『南齊書』卷十四「州郡志上」〈交趾郡〉によると、交趾郡には「龍編、句漏、武寧、朱鳶」という地名が見える。

「福祿」も〈嶺南道〉に「方輿志曰、福祿州、福祿郡。土地與九真同、唐爲福祿州。」とある。

「寧海」も、〈嶺南道〉に「方輿志曰、陸州、玉山郡。秦象郡地、漢以來屬交趾郡。梁分置黃州及寧海郡。」と、秦の象郡は梁になると、黃州と寧海を分けて設けたという。

「陽泉」「陸海」については、残念ながら確認できていない。

「懷驩」は古地図⁽³¹⁾で確認できる唐代の地名である。現在のベトナム中部・演州の南西方向、藍江の北側に位置する。

「九真」は今のベトナムの清化、義安地区にあたる。〈嶺南道〉に「方輿志曰、愛州九真郡、秦象郡地、漢武置九真郡、後漢亦同。晋亦属九真郡、宋齐因之、梁置愛州。隋爲九真郡、唐又爲愛州。」とあり、ベトナム中部地区に位置する。

「日南」は現在の広治省広治河と甘露河の合流点にあたり、〈嶺南道〉に「方輿志曰、驩州日南郡、古越裳氏国、九詛所通者也。秦属象郡、漢属九真郡。〈中略〉隋置驩州、後爲日南郡。唐爲驩州。」とし、ベトナムの南部にある。

「桂林」も古百越の地名で、現在の広西壮族自治区の西北部の象州あたりを該当するが、〈嶺南道〉に「十道志曰、梧州、蒼梧郡。秦属桂林郡。」とし、また「桂州、始安郡。禹貢荊州之域、春秋時越地。七国時爲楚越之交。〈中略、秦の始皇二十三年〉取陸梁地、是爲桂林郡。」と、秦の始皇帝代の時初めて桂林という名にした。

「象郡」は今の広西壮族自治区の南寧からベトナムの北部の一部までのあたりを指す。宋「嶺外代答」卷一「地理門」〈百粵故地〉には、「自秦皇帝並天下、〈中略〉爲南海・桂林・象郡。今之西広、秦桂林也。東広、南海也。交趾、象郡也。」と、交趾は象郡であると記していた。また「漢武帝平南海、離秦桂林爲二郡、曰鬱林、蒼梧。離象郡爲三、曰交趾、九真、日南。又稍割南海、象郡之餘壤、爲合浦郡。」と、象郡と合浦郡は隣同士であった。

以上のように古百越の雄王・鴻龐氏が管轄した地域の具体的な位置は、宋の『太平御覽』卷一七二「州郡部」十八〈嶺南道〉によって、ほぼ確認することができた。

(六) ベトナムの始祖に関する記録はもう一つあり、『新編天南雲録列傳』の「鴻龐伝」である。『嶺南摭怪列伝』巻一(甲本)の最終の一文は、「蓋百男乃百越之始祖也(キ)」とするが、『新編天南雲録列傳』は「蓋百男乃百越之始祖也」となる。この異同に関しては筆者が、文章の流れからにしても、鴻龐氏の伝記である故、始祖説話の(始祖)の方が妥当だと思う。

また鴻龐氏から始まったとされる「文身・入れ墨」という風習が本文に見える。最初の王である雄王は、その国民が山の民の道を選んだため、常に水中の生き物に困らされていたので、自分たちが洞庭湖龍君の子孫であることが分かるよう、龍蛇や水中怪物の形象を体に墨で描くように命じた。それ以後国民は蛟龍等を避けられた(i)波線」という。

百越の文身(入れ墨)の風習については、唐・魏徵勅撰『隋書』卷八十二「南蛮伝」に記録されている。

【南蛮種類與華人錯居。(中略) 俱無君長。随山洞而居。古先所謂百越是也。其俗断髮文身、好相攻討。】

南蛮の雑類は華人とともに雑居していて、君長がなく、山洞に住む。いにしえの人が言う百越はその人たちのことである(傍線)。百越の風俗は断髮・文身(波線)、互いに攻め討ちが好きだ。

百越は「百粵」とも書く。小川環樹等編角川『新字源』によると、「周代までに、今の浙江省南部から福建・広東・広西壮族自治区の各地域にいた様々な未開人の総称」とある。現在「百越」という国は存在しないが、「その子孫は主に中国西南部の各少数民族として、上記の各省・自治区に、また南太平洋諸島、フィリピン南部・インドネシアやマレーシアの南部・東南アジアのメコン川流域・台湾・琉球諸島・朝鮮半島等の地域に暮らしている」と、中国南方在住の学者が論じている。⁹²⁾

そのため、本文の雄王の民たちが住んでいる地域（fの傍線）や生活風習も、かつて同じ交趾郡に属する現在の広西壮族自治区の南壮と、より似通っている。「鴻臚氏伝」³³には、明らかに百越文化圏のみの風習が記されている（j）波線。

これらの習慣は、現在の広西壮族自治区の壮族の風習とほぼ一致している³⁴。また古文獻に見られる各地の百越の共通風習は、近年の諸考古学の結果や様々な考察によって明らかになってきた。以下のようにまとめてみた。まず龍・蛇・鳥をトーテム信仰の対象とし、断髪、文身、巫師、抜歯、巢居、水行山処、歌垣・首狩り、船棺（崖葬）・甕棺（蹲踞式葬・屈身葬、洗骨）等の風習を持つ。銅鼓等の製造技術も高い。なお稲作文化のため、百越文化圏共通の石器も確認できる。焼き畑、醸造酒、檳榔を食す、機織り（芭蕉布、苧麻等）・藍染め等がある。更に一部は漁撈文化に属し、貝塚があり、その上海人集団による真珠の養殖と採取、貝の裝飾品、石製の網用錘、水上生活者・蛋民たちは造船技術や海上貿易等も行った。

更に婚姻の特徴としては、母系社会のため、いとこ婚や通い婚の形式が多く、今日もそれらが残存する地域が多い。また南方少数民族の風習の中には、子どもを無事育てるために、生母は自分の代わり育ててくれる養母に我が子を頼むこともある。その子が成人して家を離れ、独立する際に、「割尾巴（尻尾を切る）」という名の縁切り儀式が存在する³⁵。今日の西南地域に住む壮族をはじめとするいくつかの少数民族の衣裳には、その名残的なものが見られる。この風習は極めて古い。

〈卵を拾う養母型〉の龍母卵生伝説には、この風習が見られる。①話の「端溪温媪」の文中は、養母が不注意に龍子の尻尾を切ったため、龍子が龍母の元から去ることとなった。また⑩の〈哀牢王〉の始祖卵生説話にも、哀牢族の「衣裳に尻尾のようなものがついている」というところは、これらの風習を指すものである。

(七) 百越文化圏に属する傍証となる要素は、「雄王」の当て字の変化にもある。「鴻臚氏伝」には、

【嫗姫與五十男居峯州。自相推服、尊其雄長者爲主、号曰雄王、(中略)分群弟治之。置其次爲將相、相曰貉侯、將曰貉將 (中略) 世々相傳、號爲雄王而不易】

と記された箇所が三つある。そのうちの「貉」は、辞書等によれば「戎で、中国の北方の異民族の名。蛮貉」とある。

同様の記事は、宋代の『太平広記』巻四八二「交趾」「南越志曰」にも見える。

【交趾之地、頗爲膏腴。從民居之、始知播植 (中略) 故今称其田爲雄田、其民爲雄民。有君長、亦曰雄王。有輔佐焉、亦曰雄侯。分其地以爲雄將。】

交趾の田は「雄田」といい、その民は「雄民」という。またその君長は「雄王」と称し、その補佐役には「雄侯・雄將」がある。

何故かこの記事では「貉」ではなく「雄」となる。宋代から「雄」という呼び方に定着したかと考えられる。しかし北魏の酈道元撰『水经注』巻三七「叶榆河」の「交州外域記曰」には、次のとおり記される。

【交趾昔未有郡县之時、土地有雒田。(中略) 設雒王、雒侯、主諸郡县。县多爲雒將、雒將铜印青绶。】

交趾未だ郡県の行政区画が設けられる以前、土地には「雒田」があり、後に「雒王・雒侯・雒將」を設けて、郡県を

管理させ、その上王権の象徴である「銅印・青綬」をも授かった。

「雒田」に関しては、石鐘健は「雒田が正しく、古代百越の駱越族の稲作方法の一つである。「雒」は「貉」「駱」³⁶⁾とも書き、通音字である」と指摘した。

右の『水经注』のその続きの文には、

【交趾土地有雒田。其田從潮水上下、民垦食其田、因名為雒民。】

「雒田」は海の潮水に従って上下し、雒民がそれを開墾して生活の源としている。「雒田」は潮水の中に育てた野生の海水稻のことである。³⁷⁾同じ表現は、『史記』卷一三「南越尉佗伝」に、「佗因此以兵威边、财物賂遺閩越・西甌・駱役属焉」という一文がある。その「駱」に対して、裴駰の集解注は「漢書音義曰、駱、越也。」と注釈する。なお、唐・司馬貞の索隱注が「駱田」の初見例である。司馬貞は次のように注をしている。

【姚氏案広州記云、交趾有駱田、仰潮水上下。人食其田、名為駱侯。諸県自名為駱将、銅印青綬。】

以上の考察を通して分かったのは、六朝、唐代以前の史料では、「雄」ではなく、「駱」「雒」と記した。これは恐らく「雒」「駱」「貉」は、みんな「LOU」と発音し、通音字の故であろう。いずれにしても時代が下ると「雒」「駱」「貉」等差別的な表現は、次第に「雄」と書くようになった。明代頃、ベトナムが中国から独立の動きが日に日に高まり、獣・鳥・馬偏等の負の表現をやめ、たくましい言葉の「雄」が当てられたと考えられる。

(八) 最後に「鴻臚氏伝」のように〈一胞百卵〉を生む例は、現在のところ中国の古文獻には確認することができない。

前出の分布図のまとめを見ると、卵生説話の中で、卵は一個の話型は北方に比較的多い。「鴻臚氏伝」や中国の西南少数民族、及び東南アジアの諸国の説話には、複数、また一胞（肉塊）から複数の始祖が生まれる話型がやや多く見受けられる。

例えば広西壮族自治区の三江侗族（百越族の一つ）「侗族新婚祝酒歌」の口頭伝承には、

洪水が天下を覆い、人類は唯張良と張妹の兄妹二人だけが、雷神からもらった瓢箪の中に身を潜めたため、助かった。（中略）二人は天神の旨意に従い、夫婦となった。近親婚のせいか、一個の肉団子のようなものが生まれ、それを切り開いて四方に投げたところ、その破片から侗族・苗族・瑤族・漢族という四つ民族が誕生した。

と、兄弟民族の由来を一個の肉団子から生まれたと歌う。

その他に土家族等幾つかの南方系百越族群の始祖誕生の口誦史詩や、中国の百家姓起源説を語る白族史詩「創世紀」、又九十九の村寨の誕生を説く布依族の古歌等では、いずれも、洪水後に兄妹婚で奇形な肉塊が産まれ、それを割くと複数の民族・百家の姓氏等の始祖が生まれたと語られる。³⁸⁾

しかしながら、ベトナムの「鴻臚氏伝」のように「百卵」を生むモチーフは、どこに由来するものであろう。

実はこの「百卵」という要素は、三世紀以後の仏典に見つけることができる。例えば、『大藏経』「毘曇部」所収〈阿毘達磨大毘婆沙論〉には次のようにある。

【契經中説、生有四種。謂卵生、胎生、湿生、化生（中略）人生卵者、昔於此州有人、入海得一雌鶴、（中略）生二卵、於後卵開出二童子、端正聰慧。年長出家、皆得阿羅漢果。（中略）又如毘舍佉母生三十二卵。般遮羅王妃生五百卵等。人胎生者、如今世人】

また、同書「本縁部下」の唐・三藏法師訳〈雜宝藏經〉所収〈蓮花夫人縁〉にも、五百卵を生む話がある。

【有一仙人、名提婆延。是婆羅門種。婆羅門法、不生男女、不得生天。此婆羅門、常石上行小便。有精氣、流墮石宕。有一雌鹿、來舐小便処。即便有娠、日月滿足、來詣仙人窟下。生一女子、華裏其身。從母胎出、端正殊妙。仙人知是己女、便取畜養。（中略）王見是女端正殊妙、語仙人言、與我此女。便即與之、而語王言、当生五百王子。（中略）其後不久、生五百卵、盛著篋中。時大夫人捉五百麵段、以代卵処。即以此篋、封蓋記識、擲恒河中。（中略）時薩耽菩王在下流、與諸采女遊戲河辺。見此篋來、而作是言、此篋属我。諸采女言、王今取篋、我等当取篋中所有。遣人取篋、五百夫人、各與一卵。卵自開敷、中有童子、面目端正。養育長大、各皆有大力士之力。】

仏典には以上のように数の多い卵生要素が見受けられる。そのことは日本の古代説話文学にも早くに受容されている。『日本靈異記』下巻「産生みたる肉団女子と作りて善を修ひ人を化ふる縁」第十九話に卵生説話がある。宝龜二年（七七二）十一月の話とする。

【肥後国八代郡豊服広公の妻懷妊む。（中略）一の肉団を産生む。其の姿卵の如し。夫妻祥にあらざるなりと謂。為ひて、筥に入れて蔵し、山の石の中に置く。七日を経て往きて見れば、肉団の殻開けて女子を生む。父母取。りて更に乳を哺ませて養ふ。（中略）昔仏世に在りし時に、舍衛城の須達長者の女蘇曼の生める卵十枚、開けて十の男と成り、出家してみな羅漢果を得たり。迦毘羅衛城の長者の妻、懷妊みて一の肉団を生み、七日の頭

に到りて、肉団開敷けて、百の童子有り。一時出家し、百人俱に阿羅漢果を得たり。」

又時代が下ると、日本の中世説話集『今昔物語集』巻第二・天竺篇「須達長者蘇曼女、生十卵語」第十五話と巻第五・天竺付仏前「般沙羅王五百卵、初知父母語」第六話等も、卵生説話は仏教説話として紹介されている。古代の日本人にとって卵生説話は仏教的なものだと認識されていたようである。

そのうち、諸国の卵生説話の伝承する時期はかなり不一致である。遠く離れた日本の方が古い記録が残り、インドに近いベトナムや中国の西南各少数民族の方は、十五・六世紀以後のものとなる。理由は文字を持たない地域は口頭伝承が中心となり、十五世紀〜十九世紀の間、知識人による採集か、又はヨーロッパの伝教士や冒険家の発見によって、ようやく世に知られるようになったためである。

まとめ

本稿は三・四世紀頃から出現した南中国・百越文化圏を中心に分布した龍母卵生伝説を取り上げ、分類した。百越の蛋民の生活全般に漁撈文化が深く浸透しているため、水中の生き物・龍蛇との関わりも深かったことは明らかである。龍蛇・蛙・魚類等のトータル信仰を持つ各地の蛋民の人々が、先祖が卵生である事を信じていたことは容易に想像できる。すなわち「始祖卵生神話」の源流を汲んでいる。

こうした百越文化圏の特徴を理解したうえで、先の〈卵を拾う養母型〉の類話及びベトナムの卵生神話を改めて眺めてみると、そのディテールに、この民族文化の色濃い影響を見て取ることが出来る（説話本文の横線箇所は、地名、風習、信仰などに百越文化圏の片鱗が覗くところを指したものである）。このように古態を残す龍母卵生神話が、百越文化圏に由来、若しくは影響を受けているとの指摘は、私の知る限りこれまでない。ここ数年間の類話の蒐集作業により、初めて見えてきた特徴である。

しかしながら、百越文化圏の卵生説話は、時代が下るにつれて次第に変容していく。華南の珠江流域の類話を

見る限り、始祖卵生でありながら、老婆の（拾卵型・卵を拾う養母型）の龍母伝説が最も多く、その地に暮らし
ていた古百越に属する民族をはじめとした少数民族の棄て子の風習と関係をもつと思われる。³⁹⁾

一方、中央に近い揚子江流域に行けば行くほど、水神信仰をもつ水辺の水族との異類婚により、処女が龍蛇の
子ども（又は卵）を生む（生卵型・卵を生む生母型）が多い。地図で見えるように同じ傾向の伝承は、中国の海
南島や東南アジアの類話にも見られる。しかもその特徴として産む卵は一つが多く、王権と結びつくようになる。

その後南伝仏教によるインドの卵生思想の影響を受け、東南アジアを中心に、西南・華南地域に住む各少数民
族の始祖神は、卵から生まれる話が盛んになる。更に漁撈民の移動により、海流に乗って中国の東海岸・北の内
陸地や朝鮮半島・台湾、琉球諸島・日本の九州といった環太平洋地域等へと伝播していたと考えられる。

なおその伝播の過程で、各地の特有の文化要素を取り込み、形を変えながら定着していく。これらの過程や変
容後の説話も大変興味深いものであるが、今回は紙面の都合もあり、論じるのは次の機会としたい。

【注】

(1) 袁珂氏『中国古代神話』第一章「導言」（八〇九頁。華夏出版社、二〇〇四年一月）

(2) 農学冠氏『嶺南神話解説』第五章「卵生神話的文化底蘊」（五十一〜六三頁。广西與東南亞民族文庫所収、广西民族出版社、二〇〇〇年五月）

(3) 三品彰英氏著『神話と文化史』『南方系神話要素』（卵生族祖神話）（三〇三頁〜三八一）（『三品彰英論文集』第三卷所収。平凡社、一九七一年九月）

(4) 葉春生氏「龍母信仰與西江民間文化」によると、广西壮族自治区西江の畔の梧州市（古百越地）は、龍母信仰の発祥地であり、
現在も毎年旧暦五月七日の夜に龍母の衣換え儀式を行い、五月八日に誕生日の祝い行事等をする。（農冠品氏編注『壮族神話集成』
副篇「壮族神話文論之三・雷神水神論」所収。七三四〜七三七頁。广西民族出版社、二〇〇七年六月）

(5) 宋・李昉等撰『太平広記』には「水族」の部立がある。水族は水生動物の総称で、その部には「鰐・鯨・龜・蛟龍・魚・川獺・
貝・田螺」が見られる。

(6) 珠江は川の名。清・顧祖禹撰『讀史方輿紀要』「広東二・広州府」によると、「江中有海珠石、是曰珠江」と、広州市内を流れ
る川の中州に「海珠」という名の石があるため、珠江と呼ばれた。珠江は雲南省の東境から発し、广西壮族自治区を経て、広州

市で南海に注ぐ中国南方の大河である。

- (7) 清・張英、王士禎等纂『淵鑿類函』卷四三七「鱗介部二」(龍一) 所収北京中国書店、一九八五年八月)
- (8) 五嶺は湖南省衡山から東海に至るまでの山系で、五つの嶺がある。地理的に天然のよう壁となつてゐるため、北と南の往来の妨げとなる。『太平御覧』巻五四「地部」(嶺)「広州記曰、有五嶺。大庾嶺・始安嶺・臨賀嶺・桂陽嶺・揭陽嶺」
- (9) 龍母伝説に見える端溪という地名は、時代によつて呼び方が異なる。宋・王象之撰『輿地紀勝』卷一〇一「広南東路・徳慶府」によると、「康州、晋康郡。(中略) 秦属南海郡、漢置蒼梧郡及端溪縣。(中略) 晋穆帝分蒼梧立晋康郡、宋齐以下因之。隋平陳廃晋康郡、以端溪縣属端州。(中略) 唐高祖) 置南康州。(中略) 宋・皇朝、高宗中興、以潜邸陞徳慶府。」と、秦・漢は端溪、唐は康州、清は晋康という。今日の広西壮族自治区・梧州市近くの徳慶を指す。(本稿の古地名はすべて『中国歴史地図集』による。中国地図出版社、一九八二年十月)
- (10) (4) に同じ。(七二二〜七二五頁)
- (11) (4) に同じ。(七二二〜七二三頁)
- (12) 淮河、川の名。河南省桐柏山に源を発し、安徽省・江蘇省の二省を経て、東海に注ぐ。中国の第三の大河である。その流域に洪沢湖がある。
- (13) 碑文は王健群『好太王碑研究』第四章・図4・36碑文第一面の翻刻文による。(二一九頁〜一三六頁。吉林人民出版社、一九八四年八月)
- (14) 拙論「東アジアの〈卵生神話〉の受容考・その一—中国における吞卵型を通じて—」(熊本大学文学部編『国語国文学研究』第 四九号、二〇一四年三月) 参照。
- (15) 張寿祺著「蛋家人」所収乙編「與水爲縁的經濟生活」(南方江海水上居民群的地理分布)(二二二〜二二三頁)(香港・中華書局、一九八一年十一月)。
- (16) 秦璞・徐桂蘭共著「河蛋與海蛋珠蛋」四「邕江船民經濟生活的變遷」による。(七四〜七九頁。黒龍江人民出版社、二〇〇九年七月)
- (17) 拙論「亀が女になる話—浦島伝説の源流」(『アジア遊学』第二号)に所収。勉誠出版、一九九九年三月) 参照。
- (18) 古代中国では蛮夷や外国の難解な言語を「鳥語」という。『後漢書』卷一一六「南蛮西南夷伝」に「則緩耳雕脚之倫、獸居鳥語之類、莫不孳種盡落」と記す。
- (19) 『中国歴史地図集』第二册「秦・西漢・東漢時期」の「西漢・益州刺史部南部・哀牢」を参照。
- (20) 中国道協会編『道教大辞典』「五斗米道」の条によると、五斗米道の創設者・漢の張陵の死後も、子の張衡、孫の張魯等は、巴蜀や漢中地域で晋代まで活動を続けたという。(二二七頁)(華夏出版社、一九九四年六月)

- (21) 『太平御覽』卷五十三「地部・石」の条に、「袁山松郡国志曰、梁州女郎山、張魯女浣衣石上、女便懷孕」とある。梁州は巴蜀の地名である。
- (22) 『後漢書』卷六十六「循吏」〈孟嘗伝〉「孟嘗」遷合浦太守。郡不產穀矣、而海出珠寶。與交趾比境、常通商、販貨糶糧食。」
- (23) (15) に同じ。第六章「水上居民的言語」(四九〇五三頁) による。
- (24) (16) に同じ。同所の前言(六頁) による。
- (25) 三品彰英氏著『神話と文化史』「南方系神話要素」〈卵生始祖神話〉(三四五頁) (平凡社、一九七一年九月)
- (26) (25) に同じ。
- (27) 任明華『越南漢文小説研究』第二章「黎朝(1428年〜1789年) 的漢文小説(上)」第二節「以『嶺南摭怪』爲主的志怪傳奇小説」による。(八〇〇〜八二頁) (上海古籍出版社、二〇一〇年八月)
- (28) 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会所藏陳荆和校本『大越史記全書(上)』による。
- (29) 『新編天南雲録列傳』卷一「鴻臚伝」(出嶺南摭怪) は、『越南漢文小説集』孫遜等編域外漢文小説集、全二十卷所収による。(上海古籍出版社、二〇一〇年十月)
- (30) 劉錫蕃氏著『嶺表紀蛮』第十七章「諸蛮言語之比較」(四、蛮語例三)(一三七頁) (アジア民族考古叢刊第五輯、南天書局、一九八七年一月)
- (31) (19) に同じ。第五册「隋・唐・五代十国時期」「唐・嶺南道西部」による。
- (32) 邱新民『東南亜古代史地論叢』(シンガポール、南洋学会出版、一九六九年三月) 所収「嶺慮與龍舟的原始意義」、「龍與文身的演化商榷」及び「丹老巴蜀道註脚」等の論文による。邱新民氏は、古越人の一部が水上生活者で、東南地域の八水に居住し、真珠養殖や海上貿易を行う他、海に潜る海人でもあったと指摘した。
- (33) 広西壮族自治区の北部(桂林等)に住む壮族を「北壮」と言い、南部(南寧等)に暮らしている者を「南壮」と言う。
- (34) (30) に同じ。第四章「飲食與食具」(五一頁) による。
- (35) 西南少数民族の衣装に尻尾のようなものがついている事は、本稿⑩の哀牢族の例(二重線部) 以外に、『壮族神話集成』を編輯した農冠品氏に口頭で確認した。
- (36) 『百越民族史論集』所収石鐘健氏「試論越與駱越出自同源」他論文を参照。(百越民族史研究会編、中国社会科学出版、一九八二年二月)
- (37) 海水稻については、清・屈大均『広東新語』卷二「沙田」の条に「広州辺海諸県、皆有沙田。(中略) 五日潮田、潮漫汐乾、汐乾而禾苗乃見」とある。

(38) 王孝廉『水與水神』下編「西南群族的洪水神話與水神信仰」(百越族群等の伝説)(中華民俗文叢所収、学苑出版社。一九九四年七月)

(39) 捨て子と養母の風習については、廖明君「壮族水崇拜與生殖崇拜」(二)を参照。(農冠品氏編注『壮族神話集成』副篇「壮族神話文論之三・雷神水神論」所収。七一八〜七一九頁。広西民族出版社、二〇〇七年六月)

【引用文献】

- 唐・劉恂撰『嶺表録異』、宋・范成大撰『桂海虞衡志』(山川風情叢書『南方草木状』外十二種所収、上海古籍出版社、一九九三年十二月)
- 清・屈大均(一六三〇年生〜一六九六年没)『廣東新語』(香港中華書局、一九七四年二月)
- 晋・張華(二二二年生〜三〇〇年没)『博物志』百部叢書集成所収『指海』第五函・附逸文
- 高麗・金富軾『三国史記』(一四五年成立卷一「新羅本紀」(解脫王)(国語国文学叢林所収、韓国・大提閣出版、一九八七年八月)
- 晋・干宝生年不詳〜三二八年没)『搜神記』(湖南文艺出版社、一九九七年七月)
- 梁・任昉(四六〇年生〜五〇八年没)『述異記』(明・程榮纂輯『漢魏叢書』所収、吉林大学出版、一九九二年十二月)
- 宋・李昉等撰『太平御覽』宋・蜀刊影印本(台湾商務印書館出版、一九八四年八月)
- 宋・李昉等撰『太平広記』(全十册。中華書局、一九六一年九月)
- 清・張玉書等勅撰『康熙字典』(商務印書館、一九六五年)
- 晋・常璩撰、任乃強校注『華陽国志校補図注』(上海古籍出版社、一九八七年十月)
- 宋・王象之『輿地紀勝』(中国古代地理總志叢刊所収、中華書局出版、一九九二年十月)
- 元・周達觀『真臘風土記』(中外交通史叢刊所収、中華書局出版、一九八一年三月)
- 明・宋応星『天工開物』(商務印書館、一九五四年十二月)
- 明・鄭露『赤雅』(清・鮑廷博輯『知不足齋叢書』所収)
- 宋・趙汝適『諸蕃志』(山川風情叢書外十三種所収、上海古籍出版社、一九九三年十二月)
- 北魏・酈道元『水經注』(民国民国・楊守敬、熊会貞疏。江蘇古籍出版社、一九八九年六月)
- 『呂氏春秋』(韓非子)(二十二子)所収、上海古籍出版社、一九八六年三月)
- 宋・周去非撰、楊武泉校注『嶺外代答校注』(中華書局出版、一九九九年九月)
- 『史記』『漢書』『後漢書』『晋書』『魏書』『南齊書』『隋書』(二十五史)所収。上海古籍出版社、一九八六年十二月)

『大正新修大藏経』（大正新修大藏经刊行会、一九八九年四月普及版）
中田祝夫校注『日本霊異記』（新編日本古典文学全集十、小学館）

百越文化圏における卵生説話の源流考—龍母伝説を中心に—

熊本学園大学非常勤講師 項 青

本稿では百越文化圏（南中国）と東南アジアにおける“卵生”という要素が存在する龍母伝説の受容と変容を考察する。同時に、『嶺南摭怪列伝』（『越南漢文小説集成』所収）の「鴻脰氏伝」や、中国の六朝、唐、宋以後の志怪小説や地方伝承等に見られる、人間と水族（亀、鼈、鱷、蛇、魚等の水生生物）との異類婚姻譚を確認する。

その上で、龍母伝説を朝鮮半島や日本の伝承等と比較し、黒潮に乗り移動する水の民、南方系漁撈民集団の始祖神話のあり様的一端を見出したい。

The Ryu-bo Legend in the Southern Part of China (Hyakuetsu-cultural area) and the Southeast Asian Countries

Xiang Qing,

part-time lecturer at the Kumamoto Gakuen University

The purpose of this paper is to consider various versions of the ryu-bo legend (the legend associated with Qin Shi Huang or Chinese tales in a region) which contains one of the folktale motifs, “ransei” (birth-myths of an ethnic group), and to see how the intermarriage (between human beings and aquatic life) is treated in “*Koboshiden*” (in *Reinan Shukai Retsuden*), *Shikai Shosetsu* (the collected of tales of the strange and mysterious in the period of the Six Dynasties, Tang, and Sung), and local folklores.

Furthermore, comparing these ryu-bo legends with Urashimako and Umi-Yama sachi tales in the Ki-Ki legend (*Records of Ancient Matters* and *Chronicles of Japan*) may shed some light on the state of the shiso legend (myths of the first emperor of a nation) found in the communities of the people called mizunotami, sailing across the Pacific Ocean, whose jobs are related to sea.